

川

柳

の雅

証

麻生路郎☆主宰

Pensoj flugas trans la land - limon

The Senryu Zasshi

No.295



十二月號

昭和廿六年七月一日發行第六卷第十七號 每月一回一日發行

創刊大正十三年・通卷二百九十五号









文化は輝く

# 壽像贈呈の式典

川柳生活五十年を前にして——

十一月三日—文化の日を選  
んで、日本柳壇の巨匠麻生路  
郎先生に壽像を贈呈すること  
は私達柳人として寔に意義深  
いものがある。壽像をいただ  
くのは有難いが、あまり派手  
にやらぬ様にどの先生のお言  
葉もあつたので特に選ばれた  
のが、例月の句会場に近い大  
阪市立大宝小學校の階上の清  
楚なりズム室である。グラッ

ドピアノが置かれてあり、ガ  
ツチリとした演壇もある。南  
をうけた陽ざしが、今日の芽  
出度い集りを壽ぐように身う  
ちをあたためてくれる。

早朝から來て紅白の幕を張  
つたり、菊の花瓶の位置をき  
めたりしている委員達の顔も  
はれやかである。準備の最後  
に白羽三重におゝわれた壽像  
が、壇上左寄りに世紀の光を  
投げんとしての寸前の静寂さ  
にあるのもうれしい。

開会前、早くもこの光輝あ  
る壽像贈呈の式典に列せんも  
のと柳縁につながる遠近の柳  
人諸氏が、それ／＼の椅子に  
つかれる。前不朽洞会理事長  
の戸倉普天氏も今日ばかりは  
と先生を慕つて丹波から飛ん  
で來られた。やがて、大会委  
員長中島生々庵氏の先導であ  
る。長い巻紙の一端はすでに  
床を流れている。参列者一同  
は息を呑む。壇上の先生も感  
慨無量か、いつものお眼とは  
少しちがうようであつた。

御家族席には、ベターハー  
フの葭乃夫人、川雜の編輯局  
にあつて不断の努力を続けら  
れていられる三男の一步さ  
ん、五女のリリさん、大阪  
瓦斯会社に勤務されている愛  
婿西浜聖氏夫妻のお顔が描  
う。

愈々壽像贈呈となる。可愛  
らしい振袖姿の、西尾蕉子さ  
ん(栗氏令嬢)の手が除幕のテ  
ープにのびる。サツと太陽が  
柳人達の眼に飛び込む、一瞬  
こつ然と黄金色に輝くブロン  
ズの塊が今一人の路郎先生と  
なつて、思索に耽つていられ  
るように思えた。

(大理石の台石に浮彫りの「麻  
生路郎先生壽像」の八文字は中  
島生々庵氏の筆である)

司会者翠光氏は來賓総代と  
しての祝辞を岡橋宣介氏にお  
願ひする。氏は「正邪のきび  
しい路郎先生は柳人である前  
に立派な人間である。このう  
るわしい師弟の情誼を壽像贈  
呈にみて何ともうらやましい  
次第である」と縷々讃辞を呈  
され、次いで文化の日の總元  
締役である市の教育委員長脇



田勇氏が、特に來場され「私の父淺倉義以來個人的にも親しい麻生路郎先生の「古くとも僕には仁義礼智信」の句は私の座右銘であります。これこそ全大阪、全日本へ先生が下された不朽の言葉でありましょう。名利の大阪、道義未だ回復せざる日本に、今日的美筆を見ることはお芽出度いさわみであります」と熱弁をふるわれた。

母國をはるか川雜ハツイ支部ウイロー吟社を代表して築山快夢起氏から、エヤーメルによる祝辞を武部香林氏が代読披露、ついで時間の都合上左記祝電句の二三を朗読して感謝の意を表された。

老友へ益高く朝の卓  
 東京都 村田周魚氏  
 軸かへて白菊いけて前祝  
 東京都 大島花王氏  
 キキヒキヨウキクモメアタクサ  
 キサカリ 松山市前田伍健氏

其他番傘川柳社及び岸本水府氏の祝電をはじめ、全国各地の柳社柳人諸氏並びに、東京、鳥取、出雲、岡山、弓削、下関、八代其他各支部より今日を壽ぐ言葉が到着する。

生々庵氏より壽像製作者で藝術家としての白石正義氏の紹介があった。つゞいて司会者は路郎先生をさし招くと、

路郎先生は靜に椅子から離れられ、壇下にあつて心からなる謝辞を述べられ、いさゝか卑見も述べさせていだきたいと壇上の人となられた。「先き程宣介氏の讃辞の中に正邪のきびしい人間だと思いましたが、たしかにそうした



壽像贈呈の挨拶 中島不洞理事会理事長(下壇) 小澤史義撮影

喰うことの手段にすぎなかつたのであります。尤も外國爲替の研究はそうではなかつたのですが、これはバトロンが亡くなられたので私の研究を殉死させてしまつたのです。そして私はわが道を行くで川柳道をまっしぐらに歩いて來たのです。

明治末葉に「川柳なんて老人になつてからすればよい」と私の亡き姉から苦言を呈されたこともあつたが、私は決して私の決心をかえなかつた。私たちの川柳のために私は、私は無私無慾の生活をする外は、私には風当りの強いこともあつたが、私はすべてを忍んで來た。私自身は諸君に當りの強かつたこともあるであろうが、私はただみなさんに大きくもなつてゐないと思つてゐる。」と述べられ降壇された。(拍手)

である。私は作品の上の主義主張では一步もゆずらないことにしている。そうした私を諸君は心よく容れてくれていることを私は常にありがたく思つてゐる。その点私は幸福な男である。

世間で金ヘンだ、糸ヘンだと騒いでいる時に、私はあちこちに句碑を沢山作つていただいて石ヘン景氣であつた。浮雲のような金ヘンや糸ヘンと違つて、私の石ヘンは三百年でも四百年でもつづく。これもホントに有難いと思う。川柳をあらゆる媒体によつて社会へ浸潤させて行きたいからである。こんどは金ヘンである。同じ金ヘンでも私の金ヘンはブロンズの壽像であるこの次は糸ヘンブームであるかも知れないが、私の糸ヘンは紙だと思つれば句集が出来るんじゃないかと思う。

しかし、相次ぐ諸君の好意に酬いするためには、私の幾何もない余命を川柳のためにフルに働きつゞけるより外に方法はないと思つてゐる。」と述べられ降壇された。(拍手)

川柳不朽会を代表致しまして一言御挨拶申上ます。私共は先生の限りなき御薫陶を戴きました門下生で御座居ます。長年朝夕変らぬ御指導を頂いて今日に至りました。眞に有難う御座居ます。

來る昭和廿八年の春には先生の御柳歴五十年が参ります。其御祝の第一期の企てと致しまして、此壽像を差上げる事を思ひ立ちました。

然る処モニユーマン美術協会員、創造美術協会員として令名高く、関西彫刻界の重鎮である白石正義氏の御身的な御努力と、此の企てに御理解下された江湖知名の士下生一同の謝恩の志を集めまして、本日茲に芽出度く贈呈祝賀の式を挙行出來ますことは、私共門下生として此上もない喜びでございます。

目のあたりで謙遜なうちに包みきれぬ喜びをたゞえられ、先生の温顔に接するにつけ、私共のこのさゝやかな念願達成の欣びを皆様とおわち致しまして、只々感激で一杯でございます。

先生の御行蹟を致へ上げれば到底短い時間に申し上げることは不可能な事でございます。兎に角柳人の眞髓は宇宙百較に通曉して川柳を通じ

一面を持つていますが、それが誤解される因も成したようである。晴峯君の数字的な路郎観も面白く拜聴しました。職業も晴峯君が挙げられた数より、より以上にかわつたのであります。職業は何れも

外はない。そのためには風当りの強いこともあつたが、私はすべてを忍んで來た。私自身は諸君に當りの強かつたこともあるであろうが、私はただみなさんに大きくもなつてゐないと思つてゐる。」と述べられ降壇された。(拍手)

である。私は作品の上の主義主張では一步もゆずらないことにしている。そうした私を諸君は心よく容れてくれていることを私は常にありがたく思つてゐる。その点私は幸福な男である。

世間で金ヘンだ、糸ヘンだと騒いでいる時に、私はあちこちに句碑を沢山作つていただいて石ヘン景氣であつた。浮雲のような金ヘンや糸ヘンと違つて、私の石ヘンは三百年でも四百年でもつづく。これもホントに有難いと思う。川柳をあらゆる媒体によつて社会へ浸潤させて行きたいからである。こんどは金ヘンである。同じ金ヘンでも私の金ヘンはブロンズの壽像であるこの次は糸ヘンブームであるかも知れないが、私の糸ヘンは紙だと思つれば句集が出来るんじゃないかと思う。

しかし、相次ぐ諸君の好意に酬いするためには、私の幾何もない余命を川柳のためにフルに働きつゞけるより外に方法はないと思つてゐる。」と述べられ降壇された。(拍手)

川柳不朽会を代表致しまして一言御挨拶申上ます。私共は先生の限りなき御薫陶を戴きました門下生で御座居ます。長年朝夕変らぬ御指導を頂いて今日に至りました。眞に有難う御座居ます。

來る昭和廿八年の春には先生の御柳歴五十年が参ります。其御祝の第一期の企てと致しまして、此壽像を差上げる事を思ひ立ちました。

然る処モニユーマン美術協会員、創造美術協会員として令名高く、関西彫刻界の重鎮である白石正義氏の御身的な御努力と、此の企てに御理解下された江湖知名の士下生一同の謝恩の志を集めまして、本日茲に芽出度く贈呈祝賀の式を挙行出來ますことは、私共門下生として此上もない喜びでございます。

目のあたりで謙遜なうちに包みきれぬ喜びをたゞえられ、先生の温顔に接するにつけ、私共のこのさゝやかな念願達成の欣びを皆様とおわち致しまして、只々感激で一杯でございます。

先生の御行蹟を致へ上げれば到底短い時間に申し上げることは不可能な事でございます。兎に角柳人の眞髓は宇宙百較に通曉して川柳を通じ

あいさつ





影攝葉史澤小

==||= てしに心中を像壽 ==||=

「髭」「門下」の選句総じて今日をことほぐお芽出度いも

のが多い。橋本緑雨、市場没食子、須崎豆秋、水谷鮎美、北川春巢五氏の披露がすむと賞品授與が行れた。各題天位には選者の色紙、副賞には種瓜平君の川柳漫画（新聞全紙大で句は路郎先生の恋の句）

で落賞組を羨やまし西尾葉氏の閉会の辞、つゞいて中島生々庵理事長の発声で、先生の万歳を三唱して輝く今日の日の全行事を終つた。

（戸田古方記）

祝賀の宴は夕刻から同校地下食堂で開かれ、この夜ばかりは停電の憂き目も見ず、壽像と菊花にかこまれ、瓜平氏の進行係で、なごやかに、にぎやかに、路郎先生御夫妻を中心に進められていった。ドン／＼呑む、ジャン／＼唄う。宴会係の梅里君が、カネ三ツのノドをふりまく、ミス、ミセスまでおくれはとらじと唄う。盛んなりと云うべしである。「オイ、文蝶の姿が見えんぞ」と云う声がどこからともなくする。文蝶君は式典の室のあとかたづけをして、小使さんに引渡し、部屋にカギするところまで見届けていたのである。黙々として持ち場の責任を果した文蝶君は、ソレハネのユーモリスト文蝶になつて呑み仲間に加つた。

# 胸像

麻生路郎

胸像も

主張をまげぬ

面ヲ構え

胸像に

しつかりやれど

云われそう

子に譲るものに

壽像が

一基あり

今日からは

壽像が

留守居してくれる

夜は長し

壽像の影と

僕の影

—不朽詞句帖より—

て、人の世の在り方を尋くことであるといふ事を、常に先生に伺つて居るところでござぬますが、先生こそは此百般に通じておられる権化そのものと云ふべきものでありまして、先生の高く且つ偉い見聞に至つては何人と雖も追従を許さないのがあります。

先生には川柳の子規を以て任じて居られると承つて居りますが、私共はいたしますれば、この先生こそ古への西行や芭蕉がそうであつたやうに、末長く後の世迄も日本文学史上の至宝となられる方であると信ずるものでござぬます。

この壽像贈呈も、幸ひ親しく御指導に預つてゐる私共が、先生の御贈の一日たりとも永く且つ益々御健祥ならん事を壽ぎ奉つてのことでござぬます。

先生私共門下生の心をおくみとり下さいまして、日本文学の粹であると共に、日本文学の極美であるこの川柳の爲に、何卒御自愛專一に幾久敷御指導賜りますやう御願ひ申上ます。

右卒爾ながら一言申上げ本日の御挨拶と致します。

昭和廿六年十一月三日

川柳不朽詞會代表

中島生々庵





# 川柳塔

平塚市 木村 孤浪

焼酎をかりて己れを欺くか

いつのまに買ったかマニキユアセツトあり  
口で云う程には老けぬつもりでる

奈良縣 上田 翠光

お目ざめにならないうちのコンバクト  
かすかなる接觸通動電車ゆれ

教養の相違みじめな心抱く  
愛してゐる方が犠牲を甘んじる

大阪市 武部 香林

印刷機の如く冷たい女事務  
停電をしても法華経まだ止めず

往復を歩いて野菊女郎花  
旅役者だつたとスターわるびれず

横浜市 福田 山雨楼

全杖團つんばがおよそ四十人  
世間に出て働く二男よくしやべり

弟は盗まれ姉は買う時計  
鼠の子白晝啼いたばかりに

末弘殿太郎博士を悼む

日本を引き摺りあげて逝つた人

池田市 戸田 古方

ボスらしい口きくための髭を立て  
恩なんか知らずすく／＼子は伸びる

ホノルル 内藤 草一郎

テストしたまでの恋とは淋しけれ

何さんに似てる私生児抱き歩るき  
のう／＼と年が云わせる色ざんげ  
母送るまではと恋を振り向かず

尼崎市 水谷 鮎美

歌舞伎「羅生門」より

盗賊の思ひおもひの月あかり

大阪府 西尾 栗

綺麗に生れてアパートから通ひ  
退勤の父を見向きもせず野球

御陵から御陵につゞく彼岸花  
立小便に暫しゆれてる秋の草

石炭を三池に住んで買へずいる  
潔ぎよく退職したは姦婦だけ

成人講座煙草ばかり喫つてゐる

大牟田 高田 抱逸

布哇市 岡 曉舟

済まないと遠慮したのを疑ぐられ  
ホームラン打つた所でラジオ切れ

食ふものを食つて月見の宴は果て  
課長だけ軒燈のつく社宅なり

佐賀縣 松野 えいを

金利追ふとこまで彼も成上り  
待たされて小使さんに茶をよばれ

オッサンと言はれ受付むつとする  
連れられてどこがえ／＼のかピカソ展

鈴木警視總監辭職

一將の辞表萬卒手をつかね

大阪市 市場 浚食子

白足袋も葉巻も君を待つ祖國  
講和の日祖國は停電あるばかり

吉田首相へ  
名古屋市 吉田 水車

オキユバイドジャパン消える日秋高し  
大阪市 須崎 豆秋

秋空のきれいな雲を知らぬ牛  
今晩は台風だときコスモスよ

尻ポケットから二万円つかみ出し  
街を見よ汚れた白衣鉄の足

料理屋が建つよ徹夜をしてまでも  
降らんから点かぬとけんもほろ／＼なり

停電

大阪府 北川 春巢

三千万鞆に持てばすられそう  
故郷へ御無沙汰勝の儲けよう

貧弱な乳房を出して泣き止ませ  
自画像の顔は眼鏡でそれと知れ

奈良縣 尾崎 方正

齒科の門入歯同志が笑ひ合ひ  
足首へしぱり付けとく婦人靴

仲がよいと云ふのであろう子が産れ  
ターミナルみんなが赤い羽根に見え

ペニシリンあると云ふのに石切さん  
藝なしの男火鉢の灰をよせ

下関市 櫻川 不水

大阪府 菊沢 小松園

軽べつをしてたお金を拜まされ  
子沢山近所へあやまることに慣れ

新聞で知つた知識で意見する  
謙遜が過ぎて相手が腹をたて

大阪府 木下 幽王

お座敷へ七輪をだす久し振り  
お互の身の上話する夜汽車

接吻の話ラジオも言ひよどみ

大阪市 水谷 竹莊





下関市 弘津柳慶  
 停電へ女給キッスの眞似をする  
 子の競技頃には父は酔つて  
 社会党労資がもめるようにもめ

鳥取市 杉谷湖山  
 挨拶をするさえ貧しさ意識して  
 大阪の兒か鳥取の兒か聞き正し

札幌市 山根白星  
 かくれんぼ見てる子守も同年  
 立ち寄らばエルムの樹影恋によし  
 ふるさどに続く海なるノスタルジヤ

大阪市 渡辺孫拙  
 処女性を疑ふ程の話題もち  
 せはしさに木犀の香どこへやら  
 恋の忙しさあの娘もにぎり此娘もにぎり  
 未亡人恋にかけねを忘れたり

奈良縣 飯降白香  
 通勤の顔のそろつた日は樂し  
 奈良縣 西辻竹青  
 炭坑節へ高いサーピス料拂ひ  
 三十年も前のきよえいを持ちつづけ  
 年の勢が妻に感謝を言わしだし  
 灰皿へ一円程なをねじつぶし

山口縣 長野井蛙  
 横流しするとは案山子露知らず  
 宿題の障子に軒の柿が揺れ

大阪市 上田春柳  
 衣食たりて御供撒きの派手なこと  
 布施市 森下愛論  
 アイロンの余熱お札を伸しとき  
 泣じやくる兒と雨をさく妻の留守

大阪市 太田良子

その目から誤解されてる事を知り  
 ハイキングどころか米も喰べかねて  
 お人好しが誤解の種をまいてゆき  
 岡山縣 丸山弓削平  
 アトリエを持たない方が入選し  
 嫁くと決め女氷のようになり  
 栄轉へ汽車騒を振る如く  
 老詩人ガラスの割れた時計に似

岡山縣 直原七面山  
 金策の我が影を踏む佗びしさよ  
 ストリップへ残業なんかしてをれす  
 月を踏む二人は避妊の話もし  
 好きで〜堪らぬ悪口とは知らず  
 待ちぼうけらしい人からマツチ借り  
 マチス展首をかしげた儘帰る  
 大掃除今年も邪魔な鉄カブト

大阪市 西森花村  
 停電が教えてくれた星座趣味  
 未だ蚊帳を吊つてまんねん文化の日  
 鳥取市 河村日満子  
 金貸してこつちの世帯まで困り  
 嫁さんになつての喋り恐れられ  
 すぐ抱ける姿勢で女寄つてくる  
 憎まれぬ程度に課長をやりこめる  
 もし〜もし〜こつちに用があるに切り

兵庫縣 家沢齊花  
 君が代にまだ迷うてる文部省  
 果物屋そんなに握るなども云えず  
 産制は云われなくともしています  
 パラックに居ても大学教授なり  
 忠魂碑建て、倒して又起こし

岡山市 藤本満年

鶏も怒る日があり羽根を立て  
 夜業から頭を空にして帰る  
 タクシーへ一人で乗つた馬鹿らしさ  
 デスカツション誰かいうまで控えどり  
 熊本縣 西口如川  
 誰でしたかなど、恍けた氣取り様  
 議會裏國の輿論に火をつける  
 徳島縣 姫田夕鐘  
 珍客へランプのシンを少し出し  
 岡山縣 福島鉄兒  
 もし女やつたら貞操賣つてゐた  
 うちの子で足らず他所でも子をこさえ  
 血迷うて蝗座敷の中を這い  
 岡山縣 直原湖月  
 アブレ派のキッス台風想はせて  
 あこがれた銀座で娘スラレて來  
 唯一の反抗娘首を吊り  
 岡山市 藤本茶々  
 アルバイト断つて氣が重なり  
 説教らしくなりそで子供逃げてゆき  
 溝一つ掘つて区劃整理したとかや  
 大坂市 福本翮骨  
 その守衛家は芦屋で御座居ます  
 勝手つんばになつて夜長を読み耽ける  
 兵庫縣 榎南夏六  
 オーバーの下にもあつた赤い羽根  
 こそばゆい程のサーピス受け兼ねる  
 計算をしい〜アベックさびしけれ  
 岡山縣 服部十九平  
 不機嫌へ女房黙つて燭をつけ  
 慾張つて入れた砂糖が解けきらず  
 客引がぎやんぐの様にとり





岡山縣 大森 娛句樂  
高貴藥医博と騒ぐ間に逝かれ  
乗車位置違え荷がないのに周章で  
踊るよな足取で来て花が賣れ

熊本縣 成瀬 月仙

野の花の手折るに惜しく野に惜しく  
袖の下で生きてる雑誌評論家  
鉛筆がシュツ／＼と裸婦になり

八宗兼学も如何んせん差押へ  
兵庫縣 若林 草右

消えてから来た消防も呑んで去に  
あどさきの分らぬ服が銀座ゆく  
お太鼓の胸に見かけた赤い羽  
とけてゆく蠟燭に似たわが生活

台風去る  
たゞ一つ残つた柿が赤くなり

大阪市 足立 春雄

停電が教へてくれた今日の月  
ベースアップ壘一つも変へられず  
子が育ち藥屋程の家庭藥

棺桶に入つた様なしまい風呂  
全権團團体割引程に行き  
七球が知らんが近所迷惑な  
あれ程の金で喧嘩をしてしひ

大牟田 中村 五醉

あさましや光の空箱踏んでみた  
読経の間お布施を借り歩き  
流感ですなど医者も咳をする

熊本縣 有働 芳仙

ホームシックだろうと飲みに誘はれる  
癖丈けが話題に残る凡夫の死

香川縣 大西 迷窓

千円札出せば拒絶の謎も解け  
謎かけりや女笑つて酌いでくれ  
性格が又引受ける損な役

岡山市 延永 忠美

音楽の不出來は父のせいになれ  
宋讓の仁で失恋してしま  
カナリヤに僕の月給笑はれる

滋賀縣 黄瀬 美秋  
逆向いたまゝで自判を押し  
慾ぼけてまた階段を踏みはづし

大阪府 浜畑 胡蝶  
お粗末に呼べない妻にしてしま  
出て歩くだけが能なり替ズボン  
必勝えとんだ縁起をかすがされ  
我が恋は続く若さは盡くるとも

下関市 坂田 良坊  
医者去んで布團に幽かな動き見せ  
下関市 石川 侃流  
賣り物である間の女弱いもの  
男ほど稼いで女嫁き後れ  
一藝もないのが隣の膳を食

岡山市 大倉 四案

ままごとへ立退き料の要る時世  
停電をしほに無心を追い返えし  
停電がおんなじとこをまた読ませ  
停電にも負けず齒のうくバイオリン

廣島縣 山田 季賛

ただなればこそ焼酎でもがまんする  
子が生れどこ迄金がいるのやら

岡山縣 水田 草骨

靴磨き俺には声をかけざりき  
借金を断つたので送つて出  
きつとねと書いて少女の文終り

運動会

小さいのが勝つて観覽席がわき  
玉野市 中村 ただみ

君とこの祭いつやと又飲む氣  
古川柳など引き出して名署長  
作業衣はつめたいものとあきらめて  
エロ談義あゝ老の眼のみじめさよ

大阪府 山本 葉光

義姪子嫁ぐ  
ハネムーン富士に雲なき日を祈る  
親切な乗客新婚ならばせる

大阪府 東 喜久堂

シヤンだなと思えば大きな欠伸する  
女房まで代えて飽き性物足らず  
故障らし隣のミシン静かなり

大阪府 表 天貧  
故人の顔も知らず法事の座に坐り  
急病え御用聞まで手傳はせ

倉敷市 木村 千代男

このまの文化の泉くみつきす  
よそ行の言葉に祕書はひやりとし

たっぶり  
愛嬌たっぶり  
B1 たっぶり



疲労と脚氣に  
強力メタボリン

錠・注・無痛注





詠史川柳

# につぼん (14)

## 戸田古方

### 近代社會 (3) (二十世紀)

(廿一) 世界の日本  
明治四十五年は舞台裏のワ  
ンサ時代である。このへんで  
どうやらスターの端に連つた  
わけだが、田舎ものは田舎も  
のですぐお里の知れるような  
事をやりかねない。

万国旗やたらに立てゝみたくな  
TOGOとNOGIの名前で覚  
えられ  
銃剣の力のほどを信じ切り  
日本がこゝまでのびた世界地図

(廿二) 成 金  
文明先進國が第一次大戦で  
手も足も出ないすきに、お得  
意のダンピングで市場は世界  
大にひろげるし、中國へは二  
十一ヶ條をおしつける。あわ  
よくばシベリヤをもと出兵す  
るが内外の不評でひつこむ。

成金はまだ歩の癖がぬけません  
成金のそれから二号でもめてい  
る  
喰えぬのも居るかと夕刊はいと  
おき

(廿三) 二代目の責任  
成金のおやじは子供に贅沢  
をおぼえさすことが可愛がる  
ことだと心得ている。不幸

にも子供は眞面目にこつこつとやることなんか御存知ない。やがて唐様で貸家札をかくことになる。  
ネクタイやカラーをつけてこま  
しやくれ  
押入れに入りきらないお玩具函  
赤い灯青い灯今日も見て来てか  
ら眠る

(廿四) 米騒動  
黄金の洪水がもたらしたイ  
ンフレは米を一升五十銭にま  
でせり上げ米騒動を起す。そ  
れを頂上として世は戦後の不  
景氣におそれ恐慌にまで落  
ちこむ。貧乏人は愈々貧しく  
なつて一寸やそつこの社会政  
策ではおつかない。  
お内儀さんの力の程のあなごれ  
す

その時にやつとお米の値をおぼ  
え  
笑うてたその失業をしてしま  
(廿五) 社会主義  
ロシアの赤色革命と仲々離  
脱出来ない不況の中から社会  
主義運動が活潑になり昭和の  
始めの河上博士下獄の頃まで  
おゝ方の学生は桃色ぐらゐに  
なつてしまふ。又その間に反  
動の萌芽も見逃せない。

資本論埃りにならぬうちに賣れ  
オーソドックス逆に解釈するに  
馴れ  
舞台では息子が赤で引つばられ  
赤というたゞ英雄をあこがれる  
(廿六) 軍 縮  
戦争にこりた世界の智者が  
よつての軍縮なのにもちよつ  
とでも相手より多い軍備がも  
ちたいと瘦せ細る各國のおえ  
ら方を見るとき何のための軍  
縮かわからなくなる。首を切  
られる軍人こそいゝ面の皮。  
民族の慾望という慾があり  
軍人の癖がとれないまゝで技師  
軍縮で嫁の話が又途切れ  
(廿七) 珍 品  
日本も戦争からちつとばか  
り遠のいた間に政党内閣らし  
いものが出来たが政治をうご  
かすものがやはり金であつて  
みれば袖の下やら珍品やら、  
又そのおためとしての利権や  
ら又何時戦争を起すやしれた  
ものでない。  
ちつばけな珍品だけがひつか  
り  
反対給付と吐と吐ともうきま  
り  
珍品の受渡する灯が明し  
(廿八) 諺 略  
昭和四年の満州は学生の私  
の眼にも行きづまつた感をさ  
された。はたして二年後には  
柳條溝の爆破となつた。よつ  
ほど準備が出来ていなけれは  
あゝまで手際よく満州偽國は  
作れなかつたであらう。  
張作霖殺されたともいはずに死

英雄になればタバコの名にもな  
り  
ロボットのマントの裾の陰長し  
(廿九) 昭和維新  
一國社会主義や國家社会主  
義のはやる中で一死奉公一本  
槍の若い軍人が昭和維新を呼  
号して五、一五や二、二六事件  
で良識ある指導者にテロを加  
える。破壊を甘くみた連中の  
仕業である。  
叛乱軍のどがわくく雪を喰い  
兵に告ぐその号外をとつてお  
テロリスト話せばわかる奴でな  
し  
(卅) 持たざるもの  
持てるアメリカでさへニュー  
ーデールまでして困り抜いて  
いる際、貧乏な日本がどんな  
だつたか  
想像以上  
である。し  
かし苦しい  
つからて泥  
坊をしてい  
いという理  
窟は成立つ  
だらうか。  
財閥として  
澳洲であき  
足らず  
誠切が悪夢  
の如くつき  
まとい

喫煙室—その一—  
魚 信  
水谷鮎美

人生五十にして子無し  
吉田水車  
おもしろい出しても、あの、いやな  
うめよふやせよの時代に、子無き  
者に子無し税がかゝり相な噂がと  
んだ時には、眞実ヒヤ／＼したも  
のでした。しかし、産制のかまび  
すしい昨日今日、何か國家に御奉  
公が出来たような氣にもなり、  
せめて慰めて居ります。

大丸の答には大丸の

50円 100円 300円 500円  
1000円 2000円 3000円  
5000円 10,000円の九種  
—1階商品券賣場—

大丸 大阪心齋橋

◇京・阪・神三店に共通





川柳劇

惜しい句が

二場

上田春柳氏の「惜しい句が紙屑籠にも見あたらず」「税金に追はれ  
どうしの汗をふき」「金だららいガンガラガンと春の音」を拜借して

小畑自由朗脚色

人物

課長 田上 春男  
社員 吉田 柳一  
徳田 求一

第一場

舞合——上手に、題名の句を大きく書いて張出す。下手に机(硯、紙本、一輪さしに花)紙屑籠、中央に火鉢(鉄瓶)、茶器、座蒲團三四枚、正面に懸時計(六時)「いのちある句を削れ」の張紙が書いて居る。幕の代りに襖が開く。同時に、上手から、大学生の制服を着て、白い前掛をした柳一が前掛で手を拭き乍出づ。(日鏡をかけた後くりに鉢巻をして居る)柳一「さあ、めしの仕度が出来た」と(時計を見て)「おや、もう六時だ、兄貴どうして居るんかな、又会社で居残りかな、俺が汁を炊いてるつて、ことがわからねえのかな、冷めてしまつたつて俺あ知らねえぞほんとうに。(と火鉢の前に座つて一本吸いつけて)而し、もう帰つて来るだらう、どれ、と立上りながら)ぼつ

ぼつ晩酌の爛でもしておいてやろうかな(と上手へ去る)

下手から吉田と、徳田が来る。風呂掃りの恰好で、手拭と石鹸を持つて居る。

吉田(手拭で首筋を拭きながら)あ、い、湯だった。

徳田「ちや、一寸課長とこへ寄つて行こうか。

吉田「さあ、もう帰つて居るかな。今晚は。」

柳一「(鉢巻をつきんで出づ、づーと鉢巻をしたまゝでもよい)やあ居らつしやい。

徳田「課長さん居らつしやいますか。」

柳一「未だ会社から帰つて来ないんですよ。」

吉田「あ、そうですか。」

徳田「今日は課長会議がありましたんで、ね、ちや、其の方で遅く成つて居らつしやるんでしようね。」

柳一「而し、もう帰つて来るでしようから、まあお上りなさいよ。(と座る)。」

吉田「有難う、ちや、一寸失礼させていただきます。」

柳一「さあ、どうぞ。(座蒲團を)

進める)

二入すみません。

柳一「(酒を茶碗でついで)冷ですが、一杯どうぞですか。(と自分も呑む)。」

吉田「いや、こりやござうも。」

徳田「課長さんの晩酌ぢやないんですか。」

柳一「なあに、い、んですよ。」

吉田「すみませんな。」

徳田「いただきます。」

吉田「課長さん 毎晩、晩酌をやるんですか。」

柳一「ええ、別に酒が好きでやるつて云うわけぢやないんですが、ね、あ、して永らく無駄な戦争に行つて居る間に、女房に、と云うと、僕の人みたいですが、其の留守中に、家諸共、あによめを吹きとばされてしまつてから、其後、あと益ももらはずに、ずーつと頑張つて居るのがふびんでしてね。」

徳田「はつ、はつ、いや、課長、全く御氣の毒な方ですね。」

柳一「なあに、又後をさつさともらやい、んですがね。」

吉田「はつ、はつ、それですね。」

柳一「それで僕、酒くらいやれつ

て、無理に進めて呑まして居るんですよ。」

吉田「はつ、はつ、それですか、而し、全く、課長、亡くなられた奥さんが可哀相だからつて、独身で頑張つて居らつしやるんですが、其の点、偉い人ですな。」

柳一「さあ、外にはあんまり取柄の無い男ですな。」

吉田「冗談ぢやありませんよ。」

徳田「全くだよ。」

柳一「(鉢子え鉄瓶の湯を差しながら)何しろ、こうしといいたつて、わからない程の酒呑みですからね。(以下の会話で一同てきぎに食を飲む)。」

吉田「はつ、はつ、そいつあちと無茶ぢやありませんか。」

柳一「なあに、大丈夫ですよ、兄貴は酒痴なんですかね。」

吉田「サケぢやないですか。」

柳一「シヨパンを聴いてアンパンを思出す様な音痴の上に、酒と水の区別すら判らない様な、味覚のおぼつかない男ですから、つまり酒痴つて云う奴ぢやないんですか。」

吉田「はつ、はつ、吾々には鬼課長で怖わがられて居ても、あ

んたにかゝつちや、ひどい事に成りますね。

柳一「其上に文痴でしてね。」

徳田「アンチで何んですか。」

柳一「文学が全々判らんですよ。」

吉田「そんな事はないでしよう。」

徳田「そうすよ、川柳ぢや界、田上柳春つて云えば相当有名なんぢやないんですか。」

柳一「さあ、どうぞすか。鬼に角あれ程熱心に古くからやつて居て、あれ程上達せんのですから、其の文痴つていふ点ぢや兄貴も相当有名なんでしようね。」

吉田「はつ、はつ、冗談ぢやありませんよ、君。」

徳田「そうとも、なんと云つたつて、川柳界の大御所たる藤生路郎先生の直門で居らつしやるんだからね。」

柳一「直門でも、やつぱりキリからピン迄有るんぢやないですかね。」

吉田「そりやそうかも知れませんが、而し、課長さんの様に、路郎先生の方から、是非門人に成つてくれつて、頼まれて入門したつて云う様な人は珍しいんぢやないんですか。」

柳一「へー、いや、そりや俺は初耳なんです、あなたそれ、路郎先生からお聞きになつたんですか。」

徳田「いえ、めつ、そうもない、僕等門外漢ですからまだ、路郎先生を知りそうな筈がないんですから。」

柳一「それでしようね。」

吉田「それが課長さん、何よりの御自慢でしてね。」



柳一 ほう、あなた等にはそう云

う事に成つて居るんですか、而し、それ程の兄貴がですれ、やり始めてから十年此の方、毎月二十句つづ投句して、二三ヶ月目に句か二句より先生に取つてもらえないんですから、つく／＼、本人の兄貴より、弟の僕の方が情けないですよ。

徳田 ほう、そんな事は無いでしょう、ね君。

吉田 ほう、規定としては二十句迄見てもらえる事に成つて居るんだそうですが、課長は、徒に数を多く出して、先生の御手数わすらわすより、量より質で、自己嚴選をやつて、一句か二句より出さないんだつて仰つてましたがね。

柳一 ほう、そうですか。

徳田 ほう、其の代り、出したら、其の一句か二句かは必ず出るから、未だかつて、没に成つた味だけは知らないつて事でしたが。

柳一 ほう、そうですか。

吉田 ほう、つまり課長のモットーは、量より質で、「いのちある句を創れ」つて云う、路郎先生の唯一の教えの遵法者だつて仰つて居るんですがね。

柳一 ほう、「いのちある句を創れ」つて、そりやあ僕もあれはですれ。(と張紙を指す)

徳田 ほう、あれなんですよ。柳一 ほう、たしかに至言だとは思いますが、兄貴には、あの至言の上え、永久と云う字と、一番下え、すと云う字をくつつけるのが、尤も適当ぢやなからうかと

思うんですがね。

吉田 ほう、はあ？

柳一 ほう、永久と、すをくつ／＼けると、そりやいつたいどうなるんですか。

柳一 ほう、永久にいのちある句を創れず」つて事に成るらしいんですがね。

二人 ほう、はあ？

吉田 ほう、元談ぢやありませんよ。徳田 ほう、実は僕等も最近課長に薦められて川柳を作り始めてね。

柳一 ほう、そうですか。

吉田 ほう、あなたは何故川柳をおやりに成らないのですか。

柳一 ほう、そりや僕も実はやり度くつてうづ／＼して居るんですがね。徳田 ほう、ちや、一緒にやりましょう。

柳一 ほう、ところが、兄貴が、大学を出る迄やちやいけないうつて云うんですよ。吉田 ほう、そりや又、何故ですか。柳一 ほう、学校の窓から覗いた社会なんて、ほんとうの社会ぢやないから、そんな狭い視野ではるくなく句が創れないから、学校を出て、ほんとうの社会を知つてから始めろつて云いました。徳田 ほう、成程、而しですれ、いくら学窓から見ると視野が狭いからと云つたつて人によりけりですれ。

等のあくせくとした社会でなく、別な見方の社会がある筈なんですから。

柳一 ほう、僕もそう思うんですがね。徳田 ほう、そうですよ。

柳一 ほう、そりや、兄貴よりは、自信があるんですがね。

吉田 ほう、是非おやりなさいよ。柳一 ほう、そうですよ。

徳田 ほう、僕等もいよ／＼今月から投句して見様と思ひましてね。

吉田 ほう、実はそれで御相談に上つたんですが。(とふところから句稿を出して)これ、此奴と僕の句稿なんです、課長さん、お滞りになつたら、見ておいてもらつてくれませんか。

柳一 ほう、承知しました。而しなんです、あなた等も、折角おやりになるのでしたら、もう少し、しつかりとした指導者につかれる方がいゝんですがね。

徳田 ほう、元談ぢやありませんよ、そんな事を云つて他の指導者についたりなんかしたら、僕等一つべんに敵ですよ。(と首を叩く)

柳一 ほう、はあ、とんでもない師匠に見込まれたもんですな。

徳田 ほう、はあ、これは元談ですよ、ちや失礼します。柳一 ほう、まあいゝちやありませんか、もう滞りて来るでしようか。吉田 ほう、いや、又明日会社でお出会いますから。徳田 ほう、どうもごちそうさんでした。二人 ほう、左様なら。

柳一 ほう、失礼します。

二人 ほう、手去る。柳一 ほう、兄貴に句が見てもらいたいなんで、下には下のあるもんだな。(と句稿を展げて)おや、二人共たつた二句づつちやないか、はあ、可愛相に、二十句出せるものを、兄貴の量よりも質つて云うのを真に受けて居るんだな、奴さん等も馬鹿だなあ。

此時、下手から袍を下げてあふたと春男が滞つて来る(八髭を生し、目鏡を鼻の頭までづらして居る)

柳一 ほう、あ、お滞りなさい。

春男 ほう、(答えず、座敷えとび上つて机の上をがさ／＼として)しまつた。

柳一 ほう、どうしたんですか。

春男 ほう、お前、又此の机の上を片附けたね。

柳一 ほう、え、あまり紙屑だらけで汚ならしいので一寸整理したんです。

春男 ほう、困るよ、俺の机の上を障つちやいかんと、いつも云つてる答だがね。

柳一 ほう、でも、屑屋ぢやあるまいしあ、紙屑が散かつて居ちや、人が来たつて見つともないですか。春男 ほう、(尙も探し乍)馬鹿云へ、入えの伊達や体裁のために、俺の書斎の雰囲気をごわして、詩想を掻き乱されてたまるか。柳一 ほう、すんません、而し、何が無くなつたんですか。(と立つて来る)

春男 ほう、俺が昨夜寝ずにまとめ上げた句稿をお前が何処かえやつてしまつたんだよ。

柳一 ほう、はてな、そんな句稿らしいものは無かつたですか。

春男 ほう、馬鹿云え、(と紙屑籠をぶちまけてさがしながら)俺はたしかにメモに書き止めて、この机の上に置いといたんだ。お前も探さんか。

柳一 ほう、はあ、(と紙屑を探し乍)何句程書いてあつたんですか。

春男 ほう、一句さ。

柳一 ほう、一句、一と晩寝つに考へてたつた一句ですか。

春男 ほう、徒に多作するのが能ぢやないよ駄作の一万句よりいのちある一句だよ。

柳一 ほう、そりや勿論そうですすげね、たつた一句くらいなら思い出せそうなんです。

春男 ほう、それが思出せんから探しとらんぢやないか。

柳一 ほう、そりやそうですすげね、而し、一と晩かゝつて考えた一句くらいなら、何んとかして思い出せそうなものです。

春男 ほう、うーむ。(腕を組んで考え込む)柳一 ほう、兄さん此頃どうも忘れつはいが、どうかしてやしないかな。春男 ほう、やましい。柳一 ほう、それに、努力する割に川柳も上達しないらしいからな。春男 ほう、ううさいね。柳一 ほう、一つべん中島生々庵氏に診てもらつたらどうかな。春男 ほう、馬鹿ツ、生々庵君は小兒科



専門だツ。

柳一 頭だけ診てもらんだつたら小児科が適当ぢやねえのかな。

春男 馬鹿ッ、人を弄るもたいがいにしてツ。

柳一 すみません。

春男 そんな事を云つとるひまに、もつと一々紙を展げてよく調べて見んか。

柳一 でも、兄さんの紙屑汚れえな。

春男 紙屑に美しいのがあるか。

柳一 あゝ、汚ねえ、兄さん、一鼻かんであるんだからたまらねえよ。ねえ兄さん。

春男 うん。

春男 うん、ごうも近頃頭が汚えんところを見ると、そうぢやなかるうかと実は心配して居るんだよ。

柳一 たしかにそうだよ、こりや辛田一哲氏に診てもらう方が早道かね。

春男 まあそんな事より、お前責任をもつて、何んとかして探し出してくれんと困るよ。

柳一 そんな事云つたつて無理だよ、あゝ、汚ねえ。俺あもう止めた。(と紙屑を籠えほり込んてしまふ)

春男 無責任な奴だなお前は。

柳一 ても兄さんの紙屑一々揚げたら、胸が悪くなるよ。

春男 しょうのない奴だな。(と鼻をかむ)

柳一 鼻かんで頼まれ事を思ひ出

し。つて、七面山さんの句にあつたが、鼻かんで忘れた句を思ひ出し。つてな具合にいかにもんですかね。

春男 うーむ、そういくと有難いんだがね、さあ弱つた。(と火鉢のそばへ座つて、煙をついで呑む) 折角の句をお前がごつかえやつてしまつたから、酒までちつともうまくねえや。

柳一 せ、そうでしようれ。

春男 (又ついで呑む) ちつともうまくねえな。

柳一 そうですね、いや、そう

柳一 二本目からは大分酒の味も

柳一 二本目からは大分酒の味も

柳一 二本目からは大分酒の味も

柳一 二本目からは大分酒の味も

柳一 二本目からは大分酒の味も

柳一 二本目からは大分酒の味も

柳一 二本目からは大分酒の味も

柳一 二本目からは大分酒の味も

柳一 二本目からは大分酒の味も

柳一 二本目からは大分酒の味も

柳一 二本目からは大分酒の味も

柳一 二本目からは大分酒の味も

柳一 二本目からは大分酒の味も

柳一 二本目からは大分酒の味も

### 同舟近詠

松山 前田 伍健

年甲斐もなくバチンコで拘りごられ

ラジオから聞くふるさとの笛太鼓

閑買いもした風呂敷敷西洋菓子

財産として「ホト、ギス」子に譲り

大阪 橋本 緑雨

腹立つ手紙復写してあらそふ

よるこびの言葉のあとがにぐるなり

東京 富士野 鞍馬

打合せしてあるスタジオの拍手

新國劇へ沢正を知らぬ客

金沢 安川 久留美

肥料もなく雑草は黙つてる

さりげなく粥を拜めば粥白し

柳一 そうですね、いや、そう

春男 二(又ついで呑む) あゝ、う

柳一 そうですね、いや、そう

柳一 そうですね、いや、そう

来ようかな。(と立上り) あゝ、惜しい句が紙屑籠にもみあ

柳一 何ッ。

春男 何ッ。

柳一 何ッ。

春男 何ッ。

柳一 何ッ。

春男 何ッ。

柳一 何ッ。

春男 何ッ。

柳一 何ッ。

春男 何ッ。

柳一 何ッ。

春男 何ッ。

柳一 何ッ。

春男 何ッ。

田繁君と、徳田求一君が来ましてね。

柳一 これ、(と句筒を取り上げて) 今月「川柳雑誌」を出して

春男 そうかよし。(と拵げて見て) はつ、二句つ

柳一 うまいですか。

春男 駄目々々、全々成つとりや

柳一 おや、猫の奴、金だら

春男 うむ、金だらいいガングラガ

柳一 税金に追はれどはしの汗

春男 今云つた事、もう一つべん

柳一 又ですか。

春男 税金に、何んだつて。

柳一 税金に追はれどはしの汗

春男 それ、それもついで

柳一 あゝ、そう、さつき吉

柳一 何、いつ等会社でも一番

但し、夜間上演の場合は、此時停電する。



### 第二場

舞台——第一場と同じ、それから一ヶ月後の日曜日の朝である。時計七時頃を示す。換開く、夜間なら、電気がつく。

春男——(和服の事、机に座つて、腕を組んで考えてはメモに筆を走らして居る)うむ、今朝は面白いら程が作れるぞ、やつぱり日曜日は気がゆつくり落ちつくせいかな、ほい、又出来た(と書いて又腕を組む)おや又湧いた。(と書く)

と此時、下手で豆腐屋の鈴の音がする。上手から柳一出づ、後く、うりに鉢巻をして、和服、白い前掛、或いは國防婦人会式のエプロンでもよい。片手に鉢を持って居る。

柳一——豆腐屋だれ。(と急いで)おーい、豆腐屋ア、一寸待つてくれーい。(と去る)

春男——あつ、そうだ。一と月程前に、惜しい句が紙屑籠にもみあたらす。で大騒ぎをした句を思い出した。こいつあありがてい。(と書き込む)

春男——おい柳一。

柳一——はあ。

春男——喜んでくれ。

柳一——何をですか。

春男——一ヶ月程前に、お前が無くしてしまつて、惜しい句が紙屑籠にもみあたらす。で大騒ぎをした時の句をどうも思い出したよ。

柳一——へーい、そりやよかつたですれ、いやよかつたですよ。あれをいつ迄も未練だらしく云は

れるので、僕全く、うるさくて弱つてたんですよ。で、それいつたいどんな名句なんですか。

春男——豆腐屋が鈴を鳴らして通りけり。つてんだ、ごうだ、いゝ句だらう。

柳一——豆腐屋が鈴を鳴らして通りけり。ちえツ、しようもない。

春男——な、何がしようもないんだ。

柳一——神武天皇以来、豆腐屋がサイレン鳴らしたり、ホリ貝を吹いたりしては通りや、しませんよ。(と相手にせず、上手へ去る)

春男——馬鹿だれ、あいつは、純写生句のこの淡泊な味が判らねえのかな、ちえツ、あれで川柳をやつて見様つて云うんだから話にならねえや。

と柳一出づ。

柳一——汁が出来たから朝めし済ましてしまひませんか。

春男——又汁か。

柳一——だつて、煮たり焼いたり、そんな邪魔臭い事は出来やしませんよ。

春男——情けない奴だな、お前大学迄行つて居て、汁より他の料理は出来ないのかね。

柳一——大学の法科ではカツボウの講義なんかしやしませんよ。

春男——馬鹿ツ。

柳一——それより、兎に角、朝起きたら顔くらい先に洗つたらどうですか。

春男——詩興が湧くと顔なんか洗つて居るひまなんかないよ。

柳一——豆腐屋が鈴を鳴らして通りけり。の詩興くらいでもそんな

ですかれ。お前等の様な、六法全書的な頭では詩興なんて云うものはわかりやせん。兎に角わしは顔を洗つて来るから、其間に又、机の上をさわつて琴間氣を掻きみだすんぢやないよ。(と上手へ去る)

柳一——ちえツ、何が琴間氣だ、いつた朝から顔も洗つて、机に鳴りついて、どんな詩興を湧して居るつて云うんだい。

(と机の上のメモを繰る)「ないんだい、こりや、課長会議けんけんごう、果しなし。部下二名川柳教えてくれと云う、これが句かなあ、ありや、弟が今日も汁炊く朝餉哉、ちえツ、レルの上今日も電車が走りけり、あつたり前ぢやねえか、電車が入道走つたり、田圃走つたりするか、馬鹿々々しい、いよいよ貴貴こりやごうしても一哲氏に鼻を切つてもらうか、生々庵氏に頭だけ癒してらうか、せんと救い難いよ、これでは、おや、こいつあうめい、おぼろ月四つ橋を四つ渡りけり、あ、こりやい、こりやうめい、兄貴にしては珍らしくうめい、句貴にはおぼろ月、四つ橋を四つ渡りけり。待てよ、ごつかできいた句だぜ、これは、えーつと、今宮は虫ごころなりつんばなり。ぢやねえ、これはたしか小西來山の句だつたつて、呀ツ、そうだ、涼しさに四つ橋を四つ渡りけり、小西來山の句の焼直しだよ、これは、ちえツ、しようもな

い、兄貴もいよ、焼が廻つたれ。もう駄目だ、何んと云つたつて、僕が句を止めさせてしまつて、これぢや川柳の門演だ。

(と、筆を取つて紙に字を書いて、それを「いのある句を削れ」の上と下え貼る。すると「絶対にいのある句を削れすやめろ路郎」と成る)

柳一——はつ、これぢやあんまり可哀相過ぎるかな。(と「やめろ路郎」の分だけを取つてふところに入れて、ひよいと下手を見て)おや「川柳雑誌」が来て居るよ。(と拾い上げる)

春男、顔を拭き乍ら出づ。

柳一——兄さん、「川柳雑誌」が来てますよ。

春男——お、そうか、ざれ、(とあわて、封を切り頁を繰る)今月は十七句間違ひなく出て居る筈だ。(と机に座る)

柳一——十七句の自信とはえらい剛氣だが、一寸ハンパですね。

春男——三句は試みにお前のを出したいたからな。おやツ。

柳一——十七句出てますか。

春男——うーむ。(と雑誌を机の上において唸る)

柳一——ごうしたんですよ。(囁く)ほう、でも三句出てるぢやありませんか、三句なら近年に無い大收獲ですよ、おやツ、惜しい句が紙屑籠にも見あたらす。税金に追はれればほしの汗をふき。金だらひガンガラガンと春の音。なーんだこりや、これみんな僕の口述を見さんが筆記した分ばつちしぢやありませんか。

春男——うーむ

柳一——ね、兄さん。

春男——ううさ、

此時下手から、吉田と徳田が「川柳雑誌」を手に手に持つて駈つけて来る。

吉田——課長ツ。

徳田——大変です。

春男——なんだ、朝から騒々しい。

吉田——出たんですよ。

徳田——僕も此奴も二人共、五つづつ句が出たんですよ。

春男——何ツ!

吉田——これを見て下さい。(と雑誌を見せる)

柳一——ほう、そいつは素晴らしいですね。(と、机の上の雑誌を取つて頁を繰る)あツ、出て居る出て居る、こいつあ素晴らしい

**耳鼻咽喉科**

**羊田病院**

院長 羊田哲三郎(一哲)

大阪市南区長堀橋交又点西・電話船場五〇〇〇番



や。

春男 馬鹿ツ。

二人 はあ？。(と首をすくめる)

春男 僕が添削してやつた二句づつの句を何故出さなかつたのか。

徳田 勿論出しましたよ。

春男 でも出したらんぢやないか。

徳田 はあ？。

吉田 その課長さんに添削していただきまして、絶対大丈夫つて仰言つていただきましたのは全部出なくて、僕等が勝手に作つて書き添えた五句が全部出たんですよ。

春男 怪しからん。

吉田 すみません。

春男 何故わしに断りもなく、わしの目を通さん様な句を、そんな勝手な真似をするのかね。

柳 一 はつ〜。

春男 お前はだまつてる。

柳 一 まだ何んにも云つてやしませんよ。

春男 云わんでもわかつとる。

徳田 而し、この出て居る五句、駄目なんでしょうが。

春男 そんな事をわしは云うとりやせん。

徳田 はあ？。

春男 路郎先生がお目通しに成る迄なら兎も角、一つたん先生が御選びに成つた以上、其の句を兎や角批評する事は師えの冒瀆だ。

徳田 はあ？。

柳 一 而しですれ、兄さん。

春男 お前には川柳の事なんかわ

かりやせん、横からごちや〜

口を出すんぢやない。

柳 一 はあ？。あ、そうです

かね。

春男 誰でも多く投句すれば多く

出るのには理の当然だ。

二人 はい。

春男 而しだけ、わしが兼々から

君等に云つて居るのは、万の駄

作よりも、つまり、一句でもい

い、いのちある、即ち〜と振り返

つて貼紙を指さして)ありや

り、誰だあんな悪戯をする奴

は、おいッ、柳一ツ。

柳 一 はつ〜、而しね兄さ

ん、兄さんの、そのメモの中に

ある、おぼろ月の句を見たらで

すれ。

春男 馬鹿、お前これを見たの

か。

柳 一 おそらく僕だけでなく。

(と、「やめる路郎」を貼る、

之を見て)

春男 馬鹿ツ。(と立上る)先生

の御名前なんか樂書する奴があ

るかッ。

柳 一 すんません。(見幕に怖れ

て、こそ〜と、逃れる様に、

上手に入る。)

二人も顔見合せて、こそ〜

と逃れる様に下手去る。

春男 馬鹿な奴だ、(と、路郎の

分を千切つて)先生、申訳が御

座居ません。(とおし頂いて、

ふところに入れ、永久に、と、

す、の分を千切つて、丸めて投げ

つけて、憤然として上手に入る。

そして、一升瓶と茶碗を三ツ持

つて出て来る、そして)おや。

(と、二人の居ないのに気づ

く)掃つちまいやがつたな、ま

あい、(と火鉢の前に座つ

て)夫る者は追す、来る者はこ

ばますさ、(と、酒をついで、

ぐつと呑み干し)あ、すつべ

い、面白くねえと、酒までこ

もすつぱくなるものかな、あ、

不愉快だ。

と此時、柳一が一升瓶を下げ

て来る。

柳 一 兄さん。

春男 うるさい。

柳 一 うるさいぢやありません

よ、あんたそんなに呑んで居た

ら、骨がグニヤグニヤに成つて

しまいますよ。

春男 何ッ、(と、瓶を取り上げ

て見て)あ、すつべい答だ、

酢だよ、こりや。

柳 一 はつ〜、だからあん

たにや川柳なんか作れつこはね

えと云うんですよ。

春男 馬鹿ツ、味覚と詩の感覚と

は別物だ。

柳 一 ことたえねえなあ。

襖。

### 京阪神交歓

### 市民川柳大會の

### 入賞句

大阪市長賞、兼題「音」雑音の

一つとなつて今日を生き(大阪

市)菊沢小松園、同、兼題「米」

なんとなく明日炊く米を見つめ居

り(神戸市)大山竹二、同、兼題

「交楽」交楽は亡びるものか美し

き(神戸市)木田美枝、京都市教

育委員会賞、兼題「母親」母の目

に大の男の幼な顔(池田市)島田櫻

春、神戸市教育委員会賞、兼題

「悟り」悟る事おそし笑うにはつ

かれたり(大阪市)板東翠石、大

阪市教育委員会賞、席題「茶」日

本にお茶漬といつ御献立(大阪市)

戸田古方、同、席題「女優」旅の

果女優子役の頃の夢(京都市)太

田清子、同、席題「童謡」わらべ

歌異郷に苦き酒を酌む(大阪市)

吉村翔我、同、席題「年輪」感傷

もなく年輪を金で踏む(神戸市)

房川素生、同、席題「手」妻の手

を荒らした果の原稿紙(大阪市)

川村伊知呂、京都市教育委員会賞

席題「仁王」仁王と仁王氣まづ

なつた額で立ち(大和高田市)岩

垣日本村、同、席題「友情」友情

は素通りもしてくるなり(西宮

市)奥田白虎、神戸市教育委員会

賞、席題「水」菜園へ妻のまこと

は米の水(大阪市)金泉万葉、同

席題「命あるもの」松葉杖帯る巷

の風きびし(姫路市)泉梨花子

### 社の黒板

★十一月一日から御承知の通り、

郵便物の値段が改正されて居りま

すから特に御注意を願います。近

頃になつても旧ハガキのまま投函

される方が相当あります。一人で

五枚投函して五枚とも三田宛貼る

のを忘れて居る方もあります。又

各地柳境の句報を開封せず第一種

で投函されるので不足税を絶えず

支拂わされました。これ又御留意

下さい。

### ケリル 芝 鶴

一品料理と生そば  
上六キヤピトル映  
画館 東三軒目

酒販用アイスクリーム用紙コップ  
其他食堂用紙製品一切



特殊紙器工業株式會社  
フタバカツプ株式會社

大阪市阿倍野区晴明通一丁目  
電話 天下茶屋 2802 2803



# 一路集

## 映画 須崎豆秋選

居睡りをする氣の映画見にはいり  
 羅生門村では大味嗜つきました  
 映画でも見て来なさいと邪魔にされ  
 キツスシーンだけはつきり見て帰  
 子告篇とんだ処でしまいな  
 思ひ出のある映画館子連れて  
 旅先の予定に入れてある映画  
 映画から氣抜けしたと顔が出る  
 電柱の高峰秀子に罷が生え  
 善人に映画の筋が驚異なり  
 テクニカラータイム半分か読め  
 補助椅子でひろく長い画面を見  
 恋愛の二課映画に誘はれる  
 サイレント版に郷愁めいたもの  
 姉さんの眼が光つるラブシーン  
 お隣ののくれる映画は今日かきり  
 あの映画見たわと女うまく逃げ  
 故郷で観る映画牛歳前のも  
 案ずればきりなし映画でも観よう  
 映画館隣の椅子が氣にかかり  
 大写真ちりめんじわのあるスター  
 落花生を食へに來ている映画館  
 胸骨が鳴るほど映画抱いてみせ  
 日本映画下手なキツスで笑わせる  
 映画とはキツスの多きものなり  
 隣りに十年間がたつ映画  
 手を握り二人は映画見をらす  
 佳妻あわれ天然色へ眼を見はり  
 映画見て泣く純情がまだ残り  
 映画でも見ているのやる母甘し

夏六 自由朗 良坊 天貧 胡蝶 草一郎 鉄兒 四葉 三思楼 茶々 満年 十九平 同 折草 天郎 格一 富郎 同 五風 齊花 芳仙 谷水 曉舟 方眠 美能留 七面山 麩光 茶々 薺

## 社宅 國弘二休門選

出世せぬまゝに社宅の最古參  
 女房が出世の邪魔をする社宅  
 側殺す積りで社宅をあてがわれ  
 飲む同士矢張り社宅で派を造り  
 社宅住い米は故郷から貰ひ  
 四季の富士見えて社宅もいゝ処  
 停電も社宅関係なく灯り  
 社宅への電話窓から取次がれ  
 忘れもの今日も社宅へ走らされ  
 家相など無視して社宅立ち並び  
 社宅の留守隣の鍵で間に合わせ  
 角帽で社宅へ帰へる子を自慢  
 社宅住ひ隣の傘も頼まれる  
 ゴチヤ〜とロマンも無く社宅に居  
 月給日社宅活氣をとりにぞし  
 社宅まで貰うた義理が働かせ  
 炭疽の社宅コンロの赤い色  
 社宅では隣り課長と住む氣兼ね  
 物賣りを社宅おんど手で掃へし  
 狭まい愚痴云ふに社宅鶏も飼ひ  
 月浴びて社宅のトラが掃つて來  
 社宅から集めて來ての紙芝居  
 寄宿舎が恋をした社宅の灯  
 社宅から社宅へ裁縫廻つてる  
 江戸子も京の女もいる社宅  
 社宅から買物籠が一緒に出  
 技師になる専務になる社宅の子  
 門札は名刺で済して社宅に居  
 青雲は空し社宅で鶏を飼ふ

潤年 湖月 芳仙 梵鐘 山雨楼 豆秋 水堂 四案 木陽子 米三 義弘 稍風 三思楼 ひかる 木魚 方大 茶々 太路 陽々 天貧 芳仙 代仕男 格一 青粒子 山雨楼 藤天郎 一峰 夢草 徳丸 薺花 法泉子 わたる

豆腐屋へ酒屋へ遠く社宅建ち  
 父も子も同じ工場へ行く社宅  
 社宅への寄附は会社へ言つてくれ  
 社宅から通ふズツクの折靴  
 ベタベタと瓦竝べたよな社宅  
 社宅も言のあはせたらに國旗出し  
 新社宅もう生活の音がはね  
 秀・出勤がすんでひつりする社宅  
 似たような煙をたてる社宅の暮れ  
 社宅前ごも掃かない道があり  
 氣易さは社宅同志の湯に浸り  
 社のそばに整頓された如く住み  
 押し賣が社宅の視線に負けて去  
 煤煙を皆諦めてある社宅  
 塀のなか塀が又ある良い社宅  
 表札の外に社宅の番号札  
 煙突の高さ揃へてある社宅  
 客・社宅では課長まめしく動き  
 新調が一々話題になる社宅  
 大綱えば社宅みんなが犬を飼ひ  
 社宅中相談をした見舞が來  
 安産へ社宅の額がみな揃ひ  
 人・上役の社宅こしやく犬を飼ひ  
 少し古川柳の臭ひがする、しかし「こしや  
 くな」とは、犬嫌ひの選者にとつてそのも  
 のズバリ：生活詩としての新しい川柳の  
 傾向に逆行してゐないかが心配だ。

地・作業着のまゝ社宅からさつこ出る 美能留  
 ちつと誇張しないで実感が良く出てる  
 ちつとしてその事が社宅でなくてはみられ  
 ない光景だ。

天・日の丸が同じ角度で立つ社宅 七面山  
 便所までが同じように建てられた社宅  
 その幾列かに並んだ門所に國旗が同じ角  
 度を保つてへんぼんとしてゐる。

講和調印を祝した國旗か？何れにしても  
 日本晴のもと、勞賃手を握つて祝つたこの  
 國旗の下には不平ない社風さへ、彷彿とし  
 て奥ゆかしい。

## 不朽洞

## 会から

日出发長崎、雲仙、阿蘇、別府、  
 高松を経て十五日に幣岡された  
 櫻川不水氏は下関市安岡町新町一  
 四〇五北坂一夫方へ移轉▼木下岡  
 王氏(大阪市)は大分經過がい  
 で日を消していられるとのこと、  
 一日も早く全快を祈る▼麻生路郎  
 師は十一月廿二日の準急で廿三日  
 の山陰川柳大会へ出席された▼丸  
 山弓削平氏(岡山縣)は十一月十  
 七日弓削町公民館で農業講座に農  
 人講座に講演されるとのこと  
 山根白星氏は北海道留萌市港町二  
 丁目七橋本産業株式社社留萌出張  
 所へ移られた▼藤岡至葵瑠氏は永  
 らく稻畑産業の東京重役として出  
 張されていたが最近大阪本社へ帰  
 任された▼水谷竹莊氏(大阪市)  
 は銀婚記念句集「共白髮」を十月  
 三十日に上梓された(非賣品)▼  
 菊沢小松園氏(大阪市)は大阪文  
 化祭京阪神交歓市民川柳大会で市  
 長賞をうけ川柳のため氣を吐かれ  
 た▼麻生路郎師は十二月九日に山  
 陽新聞の読者川柳大会が開催され  
 るので岡山へ赴かれることになつた  
 ▼橋本練雨氏(大阪市)は節子夫  
 人を迎えらした壽像贈呈式に同伴さ  
 れた▼木村孤浪氏(平塚市)の令  
 嬢が十一月八日札幌で結婚された  
 とのことおよろこび申上げる▼木  
 村無名林氏(大阪市)は新日本放  
 送の四時十五分大坂言葉あらべ  
 取された▼小島無聖氏(兵庫縣)  
 は家事の都合で十月限退会された





# 柳近作

路郎選

僕の横空いても若い娘はかけず 岡山縣  
 制電は子まで雨量を話しあい 田垣 方大  
 停電に妓の肌がよく匂ふ 同  
 停電に失礼な手を拂ひのけ 同  
 停電に氣弱な恋が解決し 同  
 風きつた肩が闇米かついどり 同  
 行水の 後 姿を盗まれる 岡山縣  
 貞操を賣りに出た様な家出の娘 片山 百郎  
 留守家族あるに追放先に解け 同  
 本代で飲むとは知らず妓つき 同

## 追放解除

お祝へ上れば白毛抜いてをり 同  
 父さんの菊はうつかり近寄れず 兵庫縣  
 神聖を汚した山を振り返へり 同  
 毛糸編み直きに値段を尋ねられ 同  
 愧れて居る弱身が駅の外で待ち 同  
 落ちぶれて妻の虚栄を持って余し 同  
 勝たせ度い一念肉よ卵よと 今治市  
 平生の豪語羽田でひやかされ 同  
 陳情の土産が効いて無理通り 同  
 そろく〜と鍋へ解除が箸を出し 同  
 共稼ぎどつちも月賦に追われて居 長野縣  
 パチンコで稼げる腕をさげすまれ 同  
 農繁期泣き寝入りの子忘れられ 同  
 差押へ騒ぎ二号に見限られ 同  
 放言のまだ貴方には情があり 岡山縣  
 十四で啖くとは女哀れなり 同

同 酒井ひかる  
 同 文庫  
 同 長野  
 同 高峰 柳兒  
 同 水谷 谷水  
 同

復讐よ墮ちてやるのよ酔はせてよ 同  
 貧乏に美あり菊いま咲かんとす 同  
 志成らず和尚の職を継ぎ和歌山 浅川 桑南  
 行先は知らねど嬉し母の背 同  
 用心がよいにされてる長病 同  
 話好き子が居ないのにふと氣付き 同  
 親切な地図料理屋の名刺裏 貝塚市 宮本 甲馬  
 囲われているに奥様奥様と 同  
 奥さんが留守なら行くよ云う電話 同  
 愛すればこそ暴風雨衝いて来る 同  
 歌舞伎座へ赤ん坊泣かせよう来た 東京都 松井 蛙声  
 美しき文字を愛しただけのひと 同  
 シヤンソンは巴里に遠き銀座裏 同  
 どの声も社用族らし銀座の夜 同  
 良い洒落を飛ばし女にきらわれる 愛媛縣 渡辺 曉童  
 呱呱の声月見だんごの沙汰でなし 同  
 村長の若さをほめた旬刊紙 同  
 うなづいて呉れる税吏の深い皺 大阪市 兒玉わたる  
 落武者のように遠足雨に行く 同  
 夕刊は賣れず背中に兒の寝入る 同  
 帰省した娘おろすどすぐに落ち 岐阜縣 石神 古木  
 好い娘だと見染めて居たら兒が二人 同  
 栗一つ落ちて峠を秋にする 同  
 ギター弾くなら知らず部屋を貸し 石川縣 那谷 光郎  
 石女の悲しさ二号の子を育て 同  
 だしぬけに辞職した娘の訳が知れ 同  
 停電の街恋が行く恋が行く 大阪市 佐野 牛歩  
 停留所次ぎ〜云へて車掌の子 同  
 丸刈にすれば子供と同じ顔 同  
 子供皆母に加勢し負けて寝る 倉敷市 安原 桂月  
 読めぬ本嫌いなんだと云うておく 同

病床にて

## 春秋筆雜



# 鳴雪断片

安川久留美

元日や一系の天子富士の山  
 という亡き内藤鳴雪翁の短冊を大事にして  
 いるという川柳人の告白に、思い出すのは  
 能奥のU町のふる旅籠屋の座敷に、この句  
 と同じ、鳴雪翁の作品のあったことを思う。  
 恐らく、同翁の作品頒布会で求めたもので  
 あつたらう。書はさまで達筆ではないが、  
 何しろ子規門十哲のうちでも古老格の鳴雪  
 は、俳人として一派の頭目であつた。写真  
 で見た翁の相はいかにも円潤そうな好々爺  
 で、願の罷も宗匠らしかつた。さて翁の作  
 品全部は何万句とあるうが、私も前記元日  
 の句以外は記憶に残っていない。新聞俳壇  
 の選句では、  
 馬で追う馬盗人や夏木立  
 舟で追う舟盗人や夏の月

といった風の作品を秀逸の座にとめていた。  
 いづれもコメデーがかつた小ファイルム  
 のような技巧作で、この二句から、下五の季  
 題を取れば、全く一種変な川柳想になつて  
 しまふ。鳴雪にもその頃、俳句の人事を必  
 要とした想が流れていたのであるう。Kと  
 いう俳人がよく私に、



見舞客会社の多忙云うて去に

播磨屋の最負の一人菊の席 大阪市

寄附帳へ女同志の意地があり

あきらめて添うてまんねと負むてい

子供なんですと云ふ子女の匂も

十年も無事に古びた消火弾

やがて又遇へる見送り手丈けふる

おれもあのようなもみ手をしていたか

紅つけし婦長を哀れども思ふ

一匹になつても金魚生きている

肩を持つ事も野心の 下心 岡山縣

婦警ふと身の上話につり込まれ

其の昔産業戦士いわれし身

銃執つた手に不甲斐なき檢温器 貝塚市

電氣工夫弁慶ほどに腰へ吊り

あの頃は米も搗かれたビール瓶

昔ならつたバケツリレーで風呂に

和歌山 岡崎 泰三

社用族マツチを集める趣味を持ち

しばらくは山の高さを見て登る

缺つかう事が上手な不具の子 貝塚市

座敷一つばい抜けて女たのしかり

ちよいと飲ける店を場末に見たり

父と云ふ資格一本つけてあり 大阪市

のむことで西へ東へお歴々

のむはなし午後の執務は女だけ

あゝでなくこうでなかつた年の暮 大阪市

譲る氣と譲らぬ座席割つて掛け

残業と云ふ手で娘云ひ逃れ

俸はずでに聖書に残るのみ 京都市

ハンドバッグにカメラを入れてスハイキ

汽車の笛家出を誘う村に鳴り

釣れんでもよいと言ふ程好きになり

母さんに聞えるように子の読書

うたごうて呑んだ薬の方が効き

愛の巢の所在名刺にそれと見せ 石川縣

元巡査社会の悪の底にふれ

湯の街の使えくと灯るなり

母さんの和服なつかし秋が来る 熊本市

イメージのいつまでかうもつて

すねた娘の後姿がものをい

退院が迫つた窓の明るさよ ハワイ

見送りに行つて借金思ひ出し

呼び捨てに出来ない夜学生の年

休診と門を閉じたい菊日和 米子市

車券今空しく秋の風と散り

大臣の募金カメラは見逃がさず

新しい恋で始まる日記帳 貝塚市

お見舞の金魚もうだる此の暑さ

待たされて床の布袋と対座する 出雲市

退院に赤字は秘めた馳走して

追放解除

大物のカムバックにはけむたがり 堺市

ダンスからかかると来て子を抱かず

同 村本 香果

同 太田 又州

同 塩谷三思樓

同 花岡 英子

同 滝 純香

同 由井 富郎

同 武安 嘉彦

同 久家代仕男

同 八木摩天郎

同 赤木 紅山

同 浅野 精亮

同 中谷葉菜子

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

「鳴雪選に入るには歴史の人物をよめば必ずぬける」といつたことがあるので、旧く東海紙の俳壇に

「卯の花に佐殿送る灯かな」という句を出吟して佳作にぬけたことがあ

る。その他万朝紙の俳壇で誰かの作

の作があつた。恰度浮世画を見るような、斯うした句が翁の意に叶つたのであ

る。着想が古いといへば、古いかも知れぬが、子規没後終始一貫、明治時代の俳人と

して、別に新しがるうとせず、幾十年の俳生活を送つたのである。さて前記、元日の句にしる、

一系の天子日本の富士の山と上五の季をぬけば、國家的川柳想とも思われるのである。亡き劍花坊の名吟、

暖一ツきこえぬ中の天皇旗が矢張り川柳として残される以上、之と比肩すべき想であり、強ち俳とすべきでもない。子規も夢之助の号で川柳を作つたといふから、鳴雪も川柳に対して一かどの意見もあつたこと、想像される。その俳号にする、本名の成行? をなりゆきの語呂で、「鳴雪」とした如き洒脱の氣味がふくまれている。

子規五十年忌も終つた四國松山に亡き鳴雪をも更にその個性を研究し、遺作を玩味すること敢て無駄ではあるまい。

三吉  
美顔水  
三吉



耐下げて日曜をさてどこへ行くこ 東京都 田中 稲水  
 終列車又この駅で一人乗せ 同 松下一徹郎  
 ちど灸もすえているかど里の母 高知市  
 運動会走る 吾子へ伸上り 同  
 何喰はぬ顔でアベツク戻つて居 岡山縣 佐々木告天子  
 貸ボート日傘を技倆見せたがり 同  
 求職の列に昔のダンナ居る 廣島縣 黒本 芳泉  
 化粧映えどころかつるし柿に似る 同  
 ボスどこへ行くのか胸に赤い羽根 宮崎市 野口卯之助  
 賣るよりも盗られる方へ氣を使ひ 同  
 理窟より平和のほしい今日であり ホノル、長田 大彦  
 朝鮮に赤い北風まだ止まず 同  
 詐されたとは女房に言へもせず 堺市 丹波 太路  
 アパートと書かず何町何番地 同  
 下駄の緒が切れた位で旅を止め 岡山縣 古賀 陽明  
 米の無いことも子供はしやべつこ 同  
 不渡の手形立派な丸い判 和歌山 岸本 木魚  
 パチンコ屋探しておいでと走る 同  
 言い勝つた女へ月がまるすぎる 愛媛縣 米沢 曉明  
 すみ切つた夜学のベルも秋のもの 同  
 吉右エ門観に行くパーマ当てる 貝塚市 津田 千舟  
 涙金でもと氣弱い二号なり 同  
 ニッポンの再出発へランブも出 玉野市 迫田美婦適  
 鬼ごっこするよう句碑を取り囲み 同  
 停電になるよど風呂の子を叱り 岡山縣 峰尾 魚々  
 ライターが散歩の袂重くする 同  
 貧乏へせめて明るく笑ふくせ 大牟田 新谷 風浪  
 同じ様に育てた筈に孝不孝 同  
 テレビジョン歌い手の顔批判され 新潟縣 三村 不味  
 停電にキスも出来ない理性もち 同  
 質受けの話も仲の良い夫婦 下関市 伊織 柳坊  
 運動会ドべになるなと子を叱り 同

友情も恋にははかないものだった 貝塚市 和田 一津  
 淑女にも魔女にもなつて女生き 同  
 本の名を憶へたのみの秋であり 貝塚市 藤川 播舟  
 カルメンの様な女で逃げられず 同  
 重役の息子一人に課をつくり 大阪市 香木凡太郎  
 集金が済めば借金取が待ち 同  
 惜しげなう卵を潰して呉れる母 岡山縣 田村 藤波  
 世が世なら辻に立つまい義手義足 同  
 禁煙したのも三日風邪ひちちも三日 大牟田 小川 雅人  
 外人のカメラやつぱり富士を撮り 同  
 停電を女怖れてすつと立ち 岡山縣 池田 古心  
 妾でなきやアいけないと云つた筈 同  
 外出着一應羽根をたしかめる 岡山縣 井野 格一  
 よい氣嫌廻轉燒はつぶれてい 同  
 生れ付仲人口に出来て居り 愛媛縣 八瀬田豚兒  
 どなつてる処へ買物客が来る 同  
 赤い羽根つけられて居り 愛媛縣 堀内 曉風  
 喫茶店今日は珍らし家族連れ 同  
 分れても期せずして逢ふ札所なり 岡山縣 岡田 夜潮  
 念入りのお辞儀抱く子の帽子脱げ 同  
 マネキンの様になり縫い着せれる 岡山縣 大塚美能留  
 合いに行く合いに來る胸赤い羽根 同  
 極道の末が飲み屋で出世をし 貝塚市 上田 耕平  
 ふだん着の舞妓もやはり京の味 同  
 独身もいゝなど思う大あくび 倉敷市 野田素身郎  
 考えて考えた末ねるとききめ 同  
 女將今日母としてPTAに出 大阪市 永田六竜子  
 万事は私にと女將立ち 同  
 金なんか廻り物さど呑む話 兵庫縣 吉原 紅月  
 パトロンが出来てネオンに遠く住む 同  
 怒らない母を話せるなど思ひ 堺市 堀田 羅漢  
 共学の娘は代議士になりたがり 同  
 金も娘も半分になつて戻り 芦屋市 里田一十

### 更年期の常識

岡本元馬

十月号の藤本潤年氏の更年期物語は故意に何か書残してある様ですから、それを少し書いてみたいと思ひます。

それは二つあつて、一つは男の更年期の時期が不明なこと、女が更年期後性慾がなくなるかどうかでありませう。

男の更年期は木田博士の様に六十才七十才などとすればこれは、老年期でしょう。ですから、常識通り四十一才の厄年が更年期だと思ひます。御存じの通り四十一才前後によく卒中死があります。小生の知人友人でも五人程死んでおります。この時分に生理的に大変化が起るらしいのです。この様に生理的変轉期に加えて、この頃には男も社会的地位も定まり金もできて、自然花柳界に入り、酒に女にと生活にも変化が起りがちです。食生活が生理に及ぼす影響に就ても書きたいと思ひますが、それは余談ですから、男はこの厄年は注意すべきでしょう。厄除けなどと酒宴をして祝うなどはむしろ危険です。食生活の改善やら長命の灸治やら、自強術、ラジオ体操など健康だと思つて油断をせず、にやることです。

次に、女の更年期は、生殖作用の終りであることは万人の知つている処、然しそれが性慾の終り処か、ますく旺盛になつてゆく様です。それが爲に人生に、いろいろの問題を起します。

昔、大岡越前守が母上に問われたさうです。「犯罪捜査上必要ですから知りたいたいのですが、女は何歳になれば、性慾がなくなりますか」と。すると母上は何も答えず、



なぜ俺にばかりたかるか赤い羽根  
 停電にかかわりもなく肩をもみ 大阪府 青柳扇子仙  
 まあええがええがで暮しはや四十 同 同  
 台風はラヂオの騒ぎだけのこと 愛媛縣 青野天下堂  
 振袖があるので神輿長く練り 同 同  
 親しめぬ知性敏腕婦人記者 京都市 井上 吉造  
 故郷の母親光バスに小さく居る 同 同

長男誕生

手続も楽しい扶養家族欄 米子市 小西 雄々  
 次期選挙待つ樂しみも解除組 同 同  
 取り持った恋え淋しさだけ残り 岡山市 坂井 三葉  
 おくげさに八百屋一本まけて呉れ 同 同  
 賣店は駅の時計で事がすみ 米子市 溝口五十鈴  
 くさめするにも娘ごころの所作を見せ 同 同

誕生日兎も角玉子買つて置き 京都市 佐久間折草  
 合掌の母へ満月有難し 同 同  
 撲られたのは僕なくつたのは酒か 愛媛縣 村上 旭童  
 出前持ち的な男といふなかれ 同 同  
 食事情悪く日曜起さない 岡山市 山本 焦兒  
 シャンでない方は算盤達者なり 同 同  
 ネットカチアあちらの腕へぶらぶら 奈良縣 平井 良兒  
 上役の煙草の火まで氣をくばり 同 同

給料日やつぱりステツブ軽かりき 今治市 渡辺 逸  
 主義主張轉勤へ又模様替え 同 同  
 他を様は他を様ですと母きつい 失 名  
 お悟りになつてと手紙の奥に書き 同 同  
 氣むづかしゆうちてソ頼から歸り 吳市 余頃 紅兒  
 箸を置く音にも見せる倦怠期 同 同  
 片言の悪口さへも満足し 荒尾市 松本 風車  
 看護婦も驚く肌を持つて病み 同 同  
 阿呆らしい釣する浮木を二時間見 山口縣 多田 穂波  
 月給も安いし彼女も出来ぬたち 吹田市 橋本 幸男  
 特價品身に合はないと口惜がり 大阪市 西川 惠風

満員車何とか言つて近寄つて 枚方市 山本 新陽  
 港まで送りませぬと深い仲 愛媛縣 黒川 秀義  
 交叉点無事に通れと母祈り 愛知縣 松尾 北雷  
 アルバイト香具師の符丁もちと覚え 岡山市 津田稻太楼  
 賤民の手が陛下のお袖にまゐる御代 布 哇 瀬戸紀南兒  
 何時賣れるのか骨董屋飯を食い 鳥取市 森本法泉子  
 長女もうあくびを笑う年であり 岡山縣 河野 徳丸  
 貧しさが足袋をはかせぬ子に育て 倉敷市 安原 玲花  
 煙突の影がこゝまで来る社宅 荒尾市 山崎青粒子  
 三代目税吏風情にはげまされ 廣島縣 高島 玉兎  
 今出した足袋に子供は砂を入れ 岡山縣 吉岡田頂坊  
 台風のニュース独り身軽くさき 岡山縣 佐藤千代春  
 あみ棒に疲れの見ゆる倦怠期 熊本縣 鹿本 実信  
 議事堂に裸婦像の建つ世のうつり 貝塚市 高梨 晴風  
 誘惑に意志の強さをほのめかし 岡山縣 大橋 中州  
 一着は背の低いのに占められる 岡山縣 河島 露外  
 口で済む親切だけが未だ云へず 愛媛縣 藤田 博人  
 トランプであんなお方をうらなつて 吳市 林野しずを  
 四十で逢へば社長と平社員 貝塚市 堀井 一峰  
 病む友を見舞へば貧乏羨やまれ 出雲市 佐藤まさる

母の死に

老齢とあきらめ切れぬ母が死に 京都市 松川 杜的  
 風の夜に友は天主に召されゆき 京都市 三上さんや  
 ごまかされながら逢引続くなり 愛媛縣 村上 和子  
 電話帳廣告主はもう破産 高知縣 岡本 元馬  
 誘惑に負けたい様な倦怠期 岡山縣 北口 草人  
 汽車の隅出稼の旅と誰が知る 京都市 若山 圭草  
 孫の手前もあるのに玉子をかけくれ 小林立あづま  
 父さんも一役の有る村芝居 京都市 倉田 錦川  
 面当に月賦の靴をはいて来る 岡山縣 西山 秀峯  
 恋人はこの人ですか写真帖 京都市 鈴木加代子  
 清貧の身に母のせき又しきり 岡山縣 森尾 不老

火鉢の灰をかきまわしていられたそうです。  
 越前守は、ははあー灰になるまで」かと  
 覺られたそうです。  
 ですから女は、死ぬる迄消えることはな  
 いそうですが、男の場合は、特別な人を除  
 いて、五十才六十才となると、ごんご弱  
 つてゆくのが普通で、それを証明する面白  
 い事があるのです。  
 男は年をとると多くの場合、好々爺にな  
 り、童顔になりますが、好々婆というのは、  
 聞いたことがありません。反対に東婆とい  
 うのがあるが、鬼爺というのは知りませ  
 ん。これは多分変態性慾のさせるわざだと  
 思います。仮に男が老年期でも性慾満足  
 の道があるのに、日本の女性にはそれがなく  
 て、内攻して、思いがけない方面に出てく  
 るのが嫁いびりであり、継子いじめである  
 と思います。四十才五十才で、性慾盛んな  
 女性が独身であり、息子に若い嫁をとる  
 と、嫉妬心からいらくのことが起る様で  
 す。嫁いびりな  
 らば、男にない  
 のでもわかりま  
 す。

ひごく女性の  
 悪口になりまし  
 たが、一つは日  
 本の封建性と、  
 家屋の建築様式  
 も、大いに関係  
 すると思いま  
 す。女性本位の  
 アメリカの家庭  
 なごも比較し  
 て、研究してみ  
 る必要があります  
 しょう。(完)

山之内

避妊の為に 確實

サンデー

250円  
 セン 207.80  
 セリ上 50.180





# 江戸川柳箸紙

## 阿達義雄

川柳・狂句に出て来る箸紙といふものを、句によつて検討してみたいと思ふ。

箸紙といふのは、吉原の妓楼に於て、遊女の馴染客専用の紙製の箸入である。又、馴染客とされるのは、普通三会目からであるから、この三会目頃から専用の箸紙が用意される。

三会目箸一ゼんのぬしとなり

(二一編)

下げる膳箸取つて遣る三会目

(二二編)

即ち、三会目から遊客の使ふ箸には特別の箸紙が供せられ、それには「御箸紙」などと書かれる。

ぬしの手で紙箸入と書きたんし

(二二編)

ぬしの手で御箸紙とかきんし

(二四編)

紋付の箸で荷を積む帆立貝

(一四一編)

帆立貝は鍋の代用として、之を火鉢に懸け、二人差向ひで煮物をしてお互に箸を突き込んで食ふ(小鍋立の)際用ひるもので、句意は遊客が紋のついた箸で帆立貝の中の煮物を積み上げてゐることを言つたのであらう。箸紙入に入つてゐる箸に遊客の定紋又は俳名が附けられてゐたことは次の句によつても知られる。

箸紙の廻りに喰ふは無銘也

(柳権拾遺第十四)

箸紙を持つてゐる奴の周囲に、あたりまへの箸で食つてゐるのは未だ馴染みのない。遊客である。といふ意で、無銘は定紋や俳名なしの箸、この箸紙の主になる爲には相当の金を費はなければならぬ。即ち、馴染客になる迄には相当に金がかかるのである

箸紙はこれも小判のはして出来

箱のものは言ふが、中には箸箱は傾らひ込ませる積り也

といふ句もある。箸紙が出来

る様になると、女も馴々しくなり、お互の身上話(中には嘘もまちつてゐる)などをしてたりして遊蕩も愈々佳境に入り、親や友達のいさめなども馬耳東風といふ有様になつて了ふ。

はし紙が出来て居るのでくらひ込み

第一ゼんの主となる面白さ

(二四編) 喰へぬやつ箸紙迄は買つて見す

(八七編) くらひ込むはづ箸紙が出来てゐる

(四〇編) 箸紙が出来たて息子くらひこみ

(二八編) 箸紙が出来て勘当食ふばかり

(七三編) 箸紙とは言ふが、中には箸箱のものもあつた様で、

箸箱は傾らひ込ませる積り也

(七九編) といふ句もある。箸紙が出来

る様になると、女も馴々しくなり、お互の身上話(中には嘘もまちつてゐる)などをしてたりして遊蕩も愈々佳境に入り、親や友達

のいさめなども馬耳東風といふ有様になつて了ふ。

はし紙が出来て居るのでくらひ

込み

第一ゼんの主となる面白さ

(四七編) 箸紙が出来て頭伽の馴々し

(一四一編) 最後の句は謡曲「羽衣」の「迦陵頻伽の馴々し」の文句取りである。

箸であるから食ふの縁語仕立の句が多い。

箸紙に喰ひちらかしの客はなし

(一一三編) この句は女を食ひちらかさすこ

麻生路郎先生

## 壽像贈呈者御芳名

(到着順・音順)

二五口	大阪府	中	高生々庵
一口	岡山縣	丸山	弓削平
三口	岸和田	高橋	操子
二口	東京都	富士野	鞍馬
一口	大阪府	工藤	清
二口	兵庫県	長宗	白鬼
二口	大阪府	南	捨舟
一口	松本市	石曾	根民郎
一口	(石巻像)	同	
一口	關本	延	永忠美
一口	大坂市	有	芳仙
一口	大坂市	牟田	一哲
五口	大坂市	河村	瑞川
五口	大坂市	木村	無名林
五口	大坂市	渡辺	孫拙
一口	小坂市	上野	錦水
三口	鳥取県	川柳	日の丸会
一口	(石巻像)	同	
二口半	福島縣	田村	縁朗
二口	釜石市	寺崎	三峯
一口	大坂市	木下	剛王
一口	玉野市	追田	美婚適
一口	大坂府	菅	信郎
一口	鳥取市	中島	鉄洲
一口	徳島市	池沢	樂居
五口	大坂市	高鷲	亞鈍
二口	大坂市	高	西野介
一口	大坂市	龜山	晴峯
一口	大坂市	益永	貞女
一口	岡山縣	黒田	笑泉
一口	(石巻像)	弓削	川柳社
一口	奈良縣	西垣	錦風
十口	京都府	村松	夢裡
一口	大阪府	雪野	博史
一口	岡山縣	田垣	方大
一口	岡山縣	水谷	谷水
三口	大阪府	金泉	万樂
十口	大阪府	西	浜壘
一口	大阪府	福	島鉄兒
一口	津山市	川口	一砂
一口	高取市	森本	法暴子
一口	高取市	増田	耕民
一口	高取市	里田	一十
五口	高取市	庄	万よし
一口	大阪府	佐野	牛歩
一口	大阪府	岡	本元馬
一口	高知市	岡	本元馬
一口	(石巻像)	同	
一口	奈良縣	尾崎	方正
一口	兵庫縣	若林	草右
一口	大坂市	太田	良子
一口	大坂市	足立	春雄
一口	市橋市	森	史葉
一口	兵庫縣	小沢	史葉
一口	奈良縣	西辻	竹青
五口	大阪府	市場	没食子
五口	大阪府	布施	筑川
五口	大阪府	北川	春集
一口	尾崎市	長谷川	三司
一口	尾崎市	水谷	鮎美
五口	尾崎市	角	白鷺骨
三口	大阪府	岡田	鹿の子
一口	大坂市	岡田	鹿の子
一口	高取市	岩垣	日本村
二口	大坂市	清水	白柳子
一口	高取市	寺井	鋭々
一口	大坂市	三木	泡起
一口	(石巻像)	同	
一口	大坂府	荒木	哲水



とにも掛けた句で、箸紙の客ともなれば、相手と決めた妓にだけ心を寄せ、摘まみ食ひなどは余りしないといふのである。

箸紙は、用済み後、馴染の遊女が之を預り、其の部屋に箸紙の引出しに片付けられる。その箸紙の主たる遊客が来た時に出して用ひさせるのである。

傾城のたんす飯時あけるなり

(二〇編)

とは此のことを言つたのである。

尤も、此の箸紙の引出しには、或る一人の箸紙だけがあるのではなく、その遊女の馴染客全部の箸紙が仕舞はれてあるので、遊女が馴染客の名をウロ覚えの時又は忘れた時などには、よく取り違ひて出し、「我こそは」と自惚れてゐる男の心象を害し、その爲に其の客が切れて了ふ様なこともあつた。

まづくなるはつ箸紙の名が違ひ

(一〇七編)

箸紙の粗相から客まづく成り

(七三編)

まづくなるのは食物よりも客の氣持であるから、やがて遊女との關係もまづくならうといふもの。

箸紙が汚れて来たら御用心 (七三編)

原因は何であらうと、箸紙が汚れるといふことは、遊女が其の客に対して実意(商賣的にせよ)がなくなつて来た証拠であるから、大いに用心せよとの川柳子の警告である

### 柳人 交歓 新春廣告を募る

#### 急告

- ★一ト口金百円。幾口でも申込まれた一ト口分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はおまかせ乞ふ一ト口分は五分の一段組三行。
- ★原稿締切は十二月五日限。
- ★廣告料は前金のこと

### 川柳雜誌社

年の暮になれば金に詰つてくるのは何処も同じこと、とりわけ、常日頃、借金するなどと何とも思はない遊女にとつては、越すに越されぬ年の瀬である。こんな時には、当のあるなしに抱らず、縋り

ついて無心をしてみたくなるのは、所謂、馴染の客である。今や、脈の有りさうな客は、何と言つても箸紙の主であらう。

箸の有るだけ書いて出す暮のふみ (二〇編)

華魁に振られた爲か、それとも勘当でも食つて身の処置に困つて首でも縊つて死んだのか、並々でない死に方をした遊蕩兒があつたとする。嘗ては、此の部屋に居続けをし、華魁と小鍋立をして夫婦の眞似事もしたこともあつた客だ。華魁にしても、今となつては、其の人の箸紙を引出しに入れて置いて、箸紙の引出しのあけたてに何時も見てゐるのは余り氣持の良いことではない。さて、その箸紙を禿に捨てさせようと、禿を呼んで持たせてやつたのであるが、

箸紙も禿こはがる死んだ客 (二九編)

廊の箸紙は面白い連想が伴ふ。然るに、家庭で便利の爲にご女房の作つてくれた箸紙は凡そ艶消しものであらう。面白くない箸紙を女房くれ

一筆者は新潟大学教授

(二六編)

- 一口 大阪市 菊沢小松園
- 一口 (右書像) 同
- 一口 大阪市 西 いわを
- 一口 大阪市 上田 泰柳
- 一口 大阪市 戸田 古方
- 一口 大阪市 橋本 緑雨
- 一口 大阪市 木村 水堂
- 一口 大阪市 表 天貧
- 一口 (右書像) 同
- 一口 大阪府 吉田 水車
- 一口 大阪府 森本 黒天子
- 一口 (右書像) 同
- 一口 奈良縣 石井 伸生
- 一口 西宮市 堀口 塊人
- 一口 京都市 大鶴 喜由
- 一口 神戸市 名越 由峰
- 一口 兵庫縣 小西 無鬼
- 一口 兵庫縣 家沢 齊花
- 一口 兵庫縣 田代 翠四
- 一口 佐野 野アト 占
- 一口 奈良縣 麻生 アート 江
- 一口 京都府 吉田 房
- 一口 京都府 小畑 自由 朗
- 一口 (右書像) 同
- 一口 大阪市 水谷 竹莊
- 一口 大阪府 大塚 五風 棒
- 一口 大阪府 岡橋 宣介
- 一口 兵庫縣 戸倉 普天
- 一口 京都市 中尾 都山
- 一口 京都市 西川 青美
- 一口 岡山縣 高山 朗笑
- 一口 大阪府 西尾 青一 路
- 一口 大阪市 杉谷 湖山
- 一口 大阪市 上林 粗影
- 一口 石川縣 那谷 光郎
- 一口 (右書像) 同
- 一口 秋月 宏方

- 一口 岡山縣 小林 鳴子
- 一口 大阪府 小橋 隆如
- 一口 大阪府 服部 十九平
- 一口 岡山縣 岡田 夜潮
- 一口 (右書像) 同
- 一口 玉野市 中村 たゞみ
- 一口 大阪府 西森 花村
- 一口 (右書像) 同
- 一口 大阪府 石田 沐天
- 一口 大阪市 井門 治義
- 一口 大阪府 大西 八歩
- 一口 山形縣 大塚 美能 留
- 一口 長野縣 高峰 柳兒
- 一口 横濱市 福田 山雨 楼
- 一口 大阪府 大坂 形水
- 一口 (右書像) 同
- 一口 岡山縣 藤本 潤年
- 一口 (右書像) 同
- 一口 岡山縣 藤本 茶々
- 一口 大阪府 須崎 豆秋
- 一口 大阪府 山本 葉光
- 一口 大阪府 松尾 北雷
- 一口 愛知縣 正本 水客
- 一口 大坂市 長野 文庫
- 一口 今治市

## 瓶の銀山

橋本長崎大坂市  
西通一丁目四四  
株式会社 子株 銀山  
電話四七〇七番



# 不朽洞賞カツプ 把持者の横顔

絵と文種瓜平

### 強打者の存在

#### 森下 愛論氏

(八月旬会優勝者)

アイロンさんは通信病院の資材課で十五年もアイロンを握つておられるので、家庭では奥さんのも、と聞いたら、家内とは口論ですと。それでもあるまいに、



### 川柳生活三十年

#### 土井 文蝶氏

(九月旬会優勝者)

親に似て酒もいけません踊れますが没食子さんにほめられたそうです。通信のテイの字はタレみたいで下下トラの字をかき、まだシンニユウまでつけた字ですが、そのような没食子さんゆえ酒の匂が気に入るのもむべなるかなです。しかし御本人は、今年のお正月の旬会の余興で酔っぱらいに扮したが、一滴もやらない。この点において、一滴の後輩である。



あろうが、時には嫌いなストリップも見物にゆくとゆう。

三十四才で不朽洞会では若手らしく、なかなかのハリキリボーイで、毎月の例会の世話を一人で背負っているほど立廻つて下さる。

センスも新しく、強打者の存在である。

川柳をやり始めてから麻雀をやらなくなった。だが見聞を廣くするために野球であるうが、演劇で

身を惜まずにコツコツと続けてきた功勞者である。

旬会に初めて出て、明日来るとまじめに開くも面白

の句が入賞したそう、毎晩二合きこしめすとゆうから、川柳では左党の方だろう。かつて汐見橋最終で住吉下車のつもりが堺東まで乗り過し、千鳥足で夜を徹して歩き、夜が明けたら住吉とは反対の風吹だつたので、もつと乗り過したらよかつたその後悔した。このこと以外に酔態は見ないようだから大トラとは一線を劃しておられるらしい。

### 喫煙室

その二

#### 田舎に住めば

#### 姫田夕鐘

「オーイ 柴子ちゃん ごこへ行くのちや」  
「アノー私し種付に行きよりますじや」  
「しつかり手綱を握るんだぞ」

「あのう パーマ掛けてくれますかへ」

「おかけしますよ ござうぞ」

「あのう わたしのう 小豆を持つて来とりますのや これをやつてくれますか」

「そうね まあ ないしよや つときまひよ」

- 一口 布島市 永田里 十九
- 十口 大阪府 西尾 栗
- 像付 大阪府 友淵 貴山
- 三三 大阪府 阿形 一杉
- 二口 大阪府 山田 鳥莊
- 一口 大阪府 水本 無人
- 一口 食取市 木村 千代男
- 一口 廣島市 西 華水
- 一口 大阪府 富岡 淡舟
- 一口 具城市 体温 川柳会
- 一口 助本館 西口 如川
- 一口 神戸市 飯尾 寄興史
- 二口 山口縣 長野 井蛙
- 五口 大阪府 藤村 雅光

以上は十一月十日までに御協賛費を受領いたしました分、なほ多数御申込みになつていられますので、その後の受領に対しましては次号に掲載して御厚志を永く記念

麻生路郎著 水武書房版

十一月十日

川柳不朽洞会  
代表 中島生々庵

謹而御禮申上げます  
麻生路郎

いたしたいと存じます。  
十一月十日  
川柳不朽洞会



### 川柳を研究したい人にも好適の書

本書は著者が多年のウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはどんなものか」から説き起して収むるところ三十七講、平明で親切で、初心者も本書を讀くことによつて直ちに川柳作句のコツを会得することが出来る。多年川柳している人たちにとつても又好参考書である。敢て一読を薦む。

(B6版 二二頁) 定價一〇〇円 送料金十六円

取次御注文は 大阪市住吉區西代西五丁目二五 川柳雜誌社  
電話 口座 大阪七五〇五〇





投稿規定
用紙は原稿用紙、文字を正
確に開催月日及場所記入、締
切毎月廿五日、投稿先本社宛

麻生路郎先生
壽像贈呈川柳大會

十二月三日

主催川柳不朽詞會
於市立大宮小學校講堂

出席者 路郎・股乃・正義・生々庵・文
蝶・鬮骨・香林・春柳・春巢・瓜平・
古方・綠竹・沒食子・豆秋・哲水・鮎
美・翠光・白香・白柳子・夢裡・葉
愛論・恒明・日本村・史葉・幸男
久堂・晋天・木声・水堂・貴山・夏
六・ヒン六・一草・善坊・紫郎・一
枝・二桂・山風樓・天貧・梅里・一
十・小松園・天真・すむ・黒天子・
晴峯・貞女・哲・紅山・三司・天國・
葉平・宣介・いわを・陶王・聖・奈
那・鏡々・八重子・花村・鹿子・勉・
紅月・泡起・壽代・よか楼・へとち・
節子・勇・西村・梨里・P.O.E

嬰鑣として藝術を説きたまふ 柳慶
七十三後添ひの語うかとのり 葉
眼も耳も脚もたしかで老知らず 伸生
若き日の写真と不老くらべられ すむ
いつまでも老ひ給はぬで頼りす 日満子
孫かとも見える二母を連れ歩る 豆秋
墨眼あざやかに不老ば大書する 鮎美
路郎先生へ
不老とは僕の如しと六十三 同
健康を誇つて父は老ひてゐず 春柳
不老薬支那臭い絵で宣傳し 暫
いつまでも髪が黒うて羨まれ 春巢
盟誓として秋空を夢を持ち 鬮骨
背伸びして不老は朝の水を打ち 白柳子
ホルモンが足り老い込まぬ顔の艶 沒食子
自画像に白髪なんかは見当らず 貴山
(人)絶倫の一語につきる不老振り 梨里
(地)老けてない世辞へ一本つけさせ 若菜
(天)まだ老いず男の意地を捨て切れや 文蝶
(軸)恩人の不老喜ぶ人ばかり 緑雨

兼題「不老」 橋中 緑雨選
夢あり儼あり不老とや云わん 晴峯
外出の度に鏡を覗く老父 木声
お世辞でも不老と云われ悦に入り 愛論
養生を言わず不老うらやまれ 四案
斗酒酔せず女も酔せず染めて 黒天子
アパートに住み六十を若くいる ヒン六
その若き新聞記者が聞にくる 陶王
老人とは見えない肌艶のよささ 白香
ほろ酔いにおのちも出て師は老いず 瓜平
日本を背負ひ不老の眼鏡拭く 夢裡
一まじの情熱不老を羨やませ 葉光

前祝何が何やら夢心地 若菜
良い儲け秘めてこつそり前祝 文蝶
珍客を交へて今日の前祝 伸生
今日も酒あすものむなり前祝 孫揃
前祝よい事づくめを開かされる 鏡々
大きくもつて来て前祝せびらる 夢裡
前祝と云ふ一杯飲む気なり 一十
幸先を祝えば白き菊薫る 法皇子
前祝母は信用して呉れず 陶王
幸先を祈る同志の前祝 芳仙
前祝その興奮のまゝ初日 二桂
前祝の前祝と飲んで来る 一枝
表彰へ一本つける前祝 折草
前祝まではトク／＼拍子なり 晚馬
前祝が戯立て来る前祝 元馬
悪友が戯立て来る前祝 山
あのけちがよっぽど嬉し前祝 貴山
前祝こわれる儘に墨をすり 青粒子
前祝明日の藝を一寸見せ 無六
先輩の先輩も来る前祝 鬮骨
前祝妻の嬉ぶ物も買ひ 千代男
冷でよい有合せでよい前祝 山風楼
前祝派手に初日の盞をあけ 梅里
ぐつすりと良く寝てほしい前祝 葉光
のれんからのれんをくぐる前祝 宜介
前祝またへそくりをへつられる 恒明
前祝明日の天気をほめて去に 翠光
前祝の酒へ紅葉の葉が散つて 白香
スケジュール出来てゆつくり前祝 古方
酔筆に抱負がみえる前祝 正司
前祝までして話おじやんなり 喜久堂
前祝やら本祝やらわからぬにや 葉
前祝なんなら今晚でもえゝで 日満子
前祝当てが外づれるとも知らず 豆秋
前祝史以来の壽像を囲む前祝 鮎美
(佳)高々と子を差上げる前祝 香林
(佳)電話からすこしよげてる前祝 白柳子
(佳)前祝飲める男にとりまかれ 天國
(佳)大檀那朝から目出度がつて飲み 春巢

(人)前祝みんなんひと役買った顔 ヒン六
(地)前祝明日は明るい事があり 日本村
(天)前祝内輪ばかりで手を叩き 小松園
(軸)前祝ひ手紙に存めるところを撰り 沒食子
兼題「女」 水谷 鮎美選
鏡台の女の髪は蟬に似て 幸男
未亡人云ひ寄られると茶を沸し 香林
竹の葉の柄が似合つた女なり 鬮骨
帯しめて女らしさをとりもごし 水堂
女氣をしかと感じた花があり 無六
幸福かときかれて女返事せず 一十
黒猫聞いてやれば女も氣を直し 曉明
女から持ちかけられた話です いわを
仲居部屋女の匂ひムツとする 葉
子と生きる欲が女ですゝある 五風楼
女房のうつぶんだまて聞いて 柳慶
近頃の若い女はなつちよらん 天眞
恋すてふ女はやはり弱いもの 恒明
天使曰くこんな女に誰がした 瓜平
和服着て女は別の嬌態を見せ 春巢
はにかんで女としてののけぎりよう 二桂
満ち足りて女すやすや夢に陥ち 晴峯
ストリッパパー男に出来ぬ藝あり 普天
戦争がこんな女にして丁ひ 十九平
考へも綺羅お世辞のない女 夢裡
自由主義女ごきついいことをい 古方
あごさいへ女としての線を見せ 一草
女だと知つて負けてるの知らず 日本村
おみくじを女は祈るよう引させ 光枝
鼻筋冷めた女智性見せ 翠光
言勝つて見たが淋しい厚化粧 一枝
身すくろい直す女も少し酔ひ 三司
黙つて泣いて女が勝となる 元馬
背の高い女と並び見降され 馬
風やがて女の肌をなめて去り 伸生
愛情えさからふ女の黙否極 善坊
生活を女おんなに教えられ 貴山
泣くだけ泣いて女はいと去に 夏六



去つて行く女の翡翠青く光る 愛論

霧の夜の顔塗り上げて自惚れる 宜介

女おんな男のかいしよ着て歩き 山風楼

浴ける程女は風呂で手間が要り 紅月

紺餅きりゝと女朝のこと 白柳子

捨てられた帰りの女化粧する 四案

思ひ切り泣きたい膝が女愁し 青粒子

そんなこと云ひましたかと女逃げ 豆秋

(佳) 獨みつやうに女の眼が燃える 小松園

(佳) 酔覚の水ふと女泣いていた 紅山

(佳) 美しい物に女は触れていたが 芳仙

(佳) 投票所女の票が続くなり 若花

(佳) 過去を秘め女光を吸ひつゞけ 柳風子

(佳) 愛情へ女は堰を切つたよう 月仙

(佳) お見さんから女にされちまい 日濤子

(佳) 愛ゆらぐ女が職を得てしより 天國

(佳) ひとり住む秋の女の賢くて 蛙声

(佳) もたえ臥す女ひとりの生き難く 鏡々

(佳) 手袋明きつけた女は女のトリック 同

(佳) 女なんぞ！まれと飲んでる 鉄兒

(人) 酒臭い女の唇に押えられ 幽王

(地) さんざめく光は女の哀愁か 幽王

(天) 妻にない匂ひで女逢ひにくる 幽王

(軸) 女するごとく愛するものに突きあたり 鮎美

兼題「髷」 須崎 豆秋選

油虫歡喜す髷に餌が触れ 晴峯

年とつて恥かくまいの髷落し 普天

たのもしい髷と妓に煽てられ 紅月

無精髷も野性美らしい若さなり 貞女

校長は校長らしい髷をおき 天貧

食へさせて貰ふに髷が邪魔に 木声

失業をしても髷だけ残して 幸男

勘定書仲居は髷へ持つてくる 暫

給料は髷の手前て云ひしぶり 仲生

口髷が社長代理に使われる 四案

パチンコをしたが髷が邪魔になり 梅里

口髷の一本ピンと横にすね 宜介

追放解除ひげの白さが目立つる 幽王

髷があるので重役と間違われ 水堂

素晴らしい髷だが運が向いて 柳清

さあまけまつせと髷付けがささん 天國

過去は何サンドイツチマンの髷 山風楼

散髪のおもむき直す髷を撫で 元馬

もう一度から直す髷を撫で 夢裡

髷があるから尙むらした顔に見え 柳風子

(人) 髷あとの青さ生活力溢れ 晴峯

(地) よく動く髷小言を云ひつゞけ 喜久堂

(天) 髷をつけて見れば口髷置いて 喜久堂

(拙) 髷の無い猫であつたらおかしから 豆秋

兼題「門下」 北川 春真選

私も門下としてと誇り顔 天眞

うかつにも名前忘れた門下も 恒明

叱られて門下の腕がぐつと沈え 天貧

嗣がせよと思ふ門下が先に逝き 木声

贈られる謙儀門下の血が通い 天眞

庭掃除してゝも未来ある門下 鉄兒

先ち足りた心門下の嫁の世話 水堂

氣に入つた門下は娘いやという 曉明

女弟子花輪の縁に師を囲み 弓削平

先生の額に門下の誇り見せ 花村

酔うれし師匠に肩をかす月夜 三司

門下なるほこりに心を鞭を打つ 幽王

下馬評に門下を避けて菊に立ち 法泉子

師の徳に門下紋付モーニング 貴山

胸像にむこう門下の顔と和む 喜久堂

最古参門下貞様とも親し 日濤子

フラッシュを門下と浴びる佳き日なり 幽骨

門下みなかく集まれり師を祝ふ 翠光

肖像いまままた門下にこりまかれ 宜介

古くとも三尺去つて門下行き 十九平

門下生の顔が揃ふた御元日 栗

先生が世に出て門下矜あり 千代男

風雲に耐えて門下の歡喜の日 鮎美

門下生みみずを持つて来てくれる 白柳子

津々浦々門下ある年賀状 恒明

師も純情門下も純情写真帳 天國

先生に持ち寄つて来る長壽法 無六

二次会は門下ばかりで呑み直し 梅里

門下今師の名を誉げて鹿島立ち 若菜

下足番門下としての声を持ち 芳仙

鈍才の門下へ師の愛ゆきといき 葉光

喜びの会へ日航機で門下 没食子

俊秀の門下揃うてゐて貧し 元馬

先生の酒量を門下案じ出し 若花

爆弾を抱いた門下へ師の慈愛 幽王

パチンコの名人もいる路郎門 豆秋

先生の指も理窟も知る門下 日本村

門下生でした薄名もつけました 柳亭

恩師今門下の微意を厚う受け 春集

### 本社十月句會 (大阪)

十月六日 午後六時

於 大宝文化會館

行樂のシーズンにも拘らず多数の出席者があつた。当夜路郎門の講話は漢字制限とアラビエーションに就いて語られ、終りに弓削町の川柳の盛んなこと会の進行の巧みなことを述べられた。折柄の傍電に句評を省き席題も「暗がり」の一題であつた。例により兼題、席題の披露後九時閉会した。本月の不朽優勝カッパ把持者は上田翠光氏であつた。

出席者 路郎・古方・栗・醉歩・平・最古参門下貞様とも親し 日濤子  
フラッシュを門下と浴びる佳き日なり 幽骨  
門下みなかく集まれり師を祝ふ 翠光  
肖像いまままた門下にこりまかれ 宜介  
古くとも三尺去つて門下行き 十九平  
門下生の顔が揃ふた御元日 栗  
先生が世に出て門下矜あり 千代男  
風雲に耐えて門下の歡喜の日 鮎美  
門下生みみずを持つて来てくれる 白柳子  
津々浦々門下ある年賀状 恒明  
師も純情門下も純情写真帳 天國  
先生に持ち寄つて来る長壽法 無六  
二次会は門下ばかりで呑み直し 梅里  
門下今師の名を誉げて鹿島立ち 若菜  
下足番門下としての声を持ち 芳仙  
鈍才の門下へ師の愛ゆきといき 葉光  
喜びの会へ日航機で門下 没食子  
俊秀の門下揃うてゐて貧し 元馬  
先生の酒量を門下案じ出し 若花  
爆弾を抱いた門下へ師の慈愛 幽王  
パチンコの名人もいる路郎門 豆秋  
先生の指も理窟も知る門下 日本村  
門下生でした薄名もつけました 柳亭  
恩師今門下の微意を厚う受け 春集

小兒科 内科 性病科

**安岡醫院**

安岡三四郎

道頓堀・日本橋南詰  
東(半丁)浜側  
電話南⑤三一四六

天貧・若水・喜久堂・紅山・文蝶・路人・水堂・夢裡・すゝむ・紫香・淡舟・よか樓・直・正司・一十・春草・泡起・胡蝶・十字路・綠雨・牛歩・春奇・幽骨・灰兒・三晃・康博・佐喜子・いわを・愛論・春集・晴峯・貞女・三司・鮎美・瓜平・翠光・博也・へち・野介・亞鈍・葎・梨里

兼題「因基」 麻生 路郎選

二三日置いて養子とうまがあひ 鮎美  
対局は白を黙つて取る對手 黙平  
打下す指の白さも吳清源 醉歩  
妾宅で基を打ち色気なぞ忘れ 葉光  
添寝する耳え基石の音が冴え 鉄兒  
赤字は赤字社長の間基の熱 栗  
奥さんを笑わせてから基に坐り 春集  
吳清源勝基へゆつくり袴ぬぎ 三司  
宿直を交り守衛と基を囲み 哲水  
基の手引お食事でも手離さず 正司  
取り入ると詠いを習い基を習い 泡起  
日儲になぶられてる晝の間基 牛歩  
事故なしと書いて宿直基にふきり 同  
両当り掛けてそれから喫いける 同  
星目を置く指頭の赤インキ 十字路  
間基はうつるパチリく金策が 鮎美  
基敵が就職口を見つけて来 春草  
ぼんとうの人物間基をしつて判り 同  
数帳吊つて間基は益々ばつむり 胡蝶



二勝二敗の囲碁(夜食のうさん出る  
三年目やつと一日強くなり  
お膳まで取つて甚仇帯らさず  
仕舞風呂に来て定石をそらんじ  
この灯は普通も甚だ知つて  
新聞を切り抜く程に碁に染まり  
一目が読めつ夜明けの鐘がなり  
バチリ／＼ごつて喚つて居る隣  
趣味問えばザル甚だしいとお偉方  
一日の勝え敗者もホツトする  
馬鹿な石打つなと甚鬱ふと思ひ  
情熱を囲碁に託してまだ老いず  
碁の相手首の話を聞き流し  
投了えフラツシユ浴びる吳清源  
閑寂の庭開け放つ囲碁の味  
敗けてやる囲碁心から疲れたら  
この町に本因坊の多い事

兼題「腕時計」 水谷 鮎美選

腕時計氣にして恋のプラタナス 三司  
腕時計預けてピンチ打ちに立ち 葉香  
腕時計欲しい夜学の子が帯り 同  
腕時計のリボンに少女の夢揺ら 貞女  
腕時計見るたび女場所をかえ 牛歩  
日備の監督だけが腕時計 水堂  
お逢ひ出来る時を秘めて居る腕時計 紅山  
腕時計女うぶ毛を氣にして居る腕時計 淡舟  
腕時計律氣に稼ぐ刻を指し 翠光  
案のじやうすつぽかき腕時計 博也  
飲みえ包んだ土工の腕時計 十九平  
手拭え預けた腕時計ふつて居る腕時計 哲水  
お帳場え預けた腕時計ふつて居る腕時計 同  
腕時計妻のを借りて動に出る腕時計 鉄兒  
腕時計まだ一軒を呑む氣なり 正司  
淋しい日はつきり動く腕時計 路人  
またされて見る腕時計止つて居る腕時計 緑雨  
腕時計千切れる襟にサヨウナラ 灰兒  
君の手をかか美しゆする腕時計 翠光

類寄せて腕時計をばなつかしむ 鮎美  
兼題「怪我」 土井 文雄選

怪我の功名なごと実方見くひられ 十九平  
「うづきまきか」位は云つて欲しかった 紅山  
怪我人が出来ているのに二男郎 鮎美  
怪我ですみませんと義脚で笑つて 葉光  
沃丁え辛抱せよとひとの怪我 日濤子  
この怪我を思い出せない二日酔 春草  
子の怪我え母はちろひりのはちろけ 晴峯  
寝る時にちろ子供の怪我が知れ 三司  
秋の灯籠帯の白さ目に泌み 春  
怪我さよと子を連れて目と詫言を云い 愛論  
こんな怪我ッぱつつけておけや直る 鐵兒  
繻帯の下にわかからぬ程の傷 平  
元通りにせよと怪我した子の親父 鮎美  
街角の怪我へ不良がよつてくる 同  
怪我をした子に付いて来る二三人 同  
赤米でミシンを掛けた様な怪我 同  
傳え聞く怪我は段々大きなり 酔歩  
鼻少し高いと知れたかすりきつ 酔歩  
愛妻の怪我えメンタム見つかから 路人  
大根の怪我を効能書で知り 夢裡  
怪我をした翌日だけは飲まずに居 瓜平  
怪我をする程あんたは何処で呑んだんや 同  
モウこれで血は止ります煙草の粉 十字路

兼題「暗がり」 富岡 淡舟選

暗がりに恐縮して居るお玄閑 葉  
暗がりを口程女恐わがらす 一十  
暗がりにいよ／＼無口者となり 栗  
暗がりで電話は鳴るしつまつくし 泡起  
暗がりのこらに／＼ぶぶぶぶぶぶ 三司  
暗がりでただ手をにぎるだけの恋 酔歩  
暗がりを同じ歩調で直行く 黙平  
暗がりでいよ／＼二人肩を寄せ よか  
泣いてる暗がりがエマツチする 正司  
暗がりを炭坑節で通り抜け すむ  
暗がりに袖をかじつてゐるらしい 佐喜子  
急用で行く暗がりはけつまつつき 緑雨

川 下關支部句會(下関市)  
十月十五日 石川 侃流報

暗がりの恋がライトに突当り 牛歩  
暗がりの駅前ボリスヌツツといふ 春集  
暗がりの夜道煙草を喫ひ続け 同  
暗がりの女の膝がそこにあり 一十  
暗がりをさけて帯れも母らしい 路人  
暗がりの散歩理性のみだれ勝ち 紅山  
暗がりえ自分の位置を確める 春草  
暗がりに動けば叱る針仕事よか 水堂  
暗がりに来てから女氣が変り 水堂  
暗がりに老母はあつて立居する 葉  
暗がりの幻想ジヤスミン句つて来 哲水  
暗がりの孤独のひびきをこき抱く 貞女  
暗がりに関配さんをこき下ろす 淡舟

川 京都支部句會(京都市)  
十月十六日 於伸 源寺  
村松 夢裡報

断つて後の淋しい嫁の口 烏雀  
断るとして一應の話をきく 白扇  
断るともなく現狀を訴へる 井住  
断りの葉書半分白きまま 葉八  
再縁を断る寡婦の金指環 葉八  
ば／＼さまの眼鏡跳足をにらむなり 同  
近所から跳足の孫を返しに來 同  
エビガニとごろんこを跳足の子 竹馬  
子供無事妻の跳足を笑ひ合ひ 烏雀  
肺院の芝に跳足を樂しとす 司郎  
儲かつた跳足を派手に洗ふ音 紅壽  
空カんと竿鉄橋を行く跳足 紫蘭  
虹消えてしまへば／＼の長い土堤 迷々  
別れ道虹はうしろの方に立ち 迷々  
梨の忠捨てる窓なり虹眞上 紅陽  
虹消えて墮ちし女にたちかへる 豊次  
いばりがすむと虹も消へてる 迷々  
美しい虹へ電車カーブして別れ 井住  
虹をくぐつてあひるの列が来る 白扇

★大万川柳(第十回)を募る  
梅里の店 大萬  
アベノ橋地下映画食道街  
御投句は大万宛・どなたでも

東京そばと 灘一とすじ  
釣銭がいらなくなつた値上なり 柳坊  
神殿の太鼓神代のままの音 木陽子  
祕書未だ社長の腹藝のみ込めず 妻揚子  
もく／＼と只呑んで居る藝のなき のぼる  
臨時給買ひ度いものが多過ぎる 妻揚子  
洗ひまじよかと理髪屋に起される 同  
薔巴む氣持か空くじを買ひ 同  
手理れに医師形だけの手当をし 同  
三味を持つ女房と知つた栄轉日 同  
おじぎ一つが藝八といふ身のこなし 同  
マネキンの柄を割引して眺め 同  
粉薬へ替り手当も又替り 同  
ホケットからゴミこ一緒の小銭が出 同  
P.T.A金の工面へ暇がなし 同  
金策が出来て近道して戻り 同  
眞四角に座る収入役無藝 同  
銭單位わすれた様なきつばかり 同  
纏つきと知らず工面の金買ぎ 同  
應急の手当を裏めて脈を見る 同  
土産店すらりと並ぶ鳥居前 同  
他所行きの顔にマネキンして返し 同  
あきらめて有獎の尼で世を送り 同  
あけてまた銭に縁なき我が財布 同  
藝事が好きで一生後家ですぎ 同



工面して持たす月謝の遅れ勝ち 素人  
チヨツヒリの手当へ税の抜目なく 同  
朝かぐら鳥を里の方へやり かうたる  
質入れの釜に弱めと見ゆるなり 同  
マネキンも人氣食堂も人氣 二休門  
割込んで聞く風に見せすり稼ぐ 同

雑川 岡山支部句會(岡山市)

九月十五日 於 弘済会ハウス 藤本 潤年報

野球放送の青さを説明し 鉄 人  
宵空と銀波ヨットの上的恋 一子  
流行歌しか唄へない藝者が来 六甲帽  
美容院半日遊ぶ氣で出掛け 格一  
姉の眼に無駄金的美容院 吉備平  
後樂園城のないのがものたらす 三葉  
相性を云うて進まぬ式をあけ 潤年  
相性がまず年寄りのお氣に入り 吉備平  
相性は良いがお金のない生活 風來子  
母ちやんの機嫌がわかる流行歌 方大  
一節で後はつまつた流行歌 茶々  
流行歌覚えた頃はすたれてゐ 忠実  
流行歌唄つてベタル軽くなり 御免  
宴會の人氣流行歌がさらい 焦兒  
乳不足流行歌では寝てくれず 格一  
前奏も口でやつてる流行歌 草骨  
流行歌一つの前にかき消され 久米雄  
流行歌だけは一人前となり かをる  
流行歌馬鹿とは思へぬ節廻し 三林坊  
共稼ぎして独立がやつと出来 格一  
独立はささおちよいく足しやう 正一男  
独立の一步を間借から始め 吉備平  
独立へ名刺またたく間につかい 潤年  
独立はしたげ流行らぬ医者となり 七血山  
独立の日を夢見つゝカナン磨ぐ 風柳  
屋根だけの小火に消防不足そう 同  
天ぶらの洋館屋根は日本式 潤年  
小雨にも仰出するトタン屋根 同  
お隣りの南瓜家の屋根で肥え 谷水

雑川 大牟田支部句會(大牟田市)

十月 於 三染福利係室 富田 一葉報

屋根へ出て来る雨漏り見つから 草骨  
俄大工兩戸の下から釘が生え 十時充  
如才ない大工積木も切つてやり 青柳  
千光燭の下で大工の見積書 翠平  
泣くこともあつて大工の弟子はな 大城戸  
大工不図眼に止る柿の色 トンボ  
有難い母の情の泣む爲替 白蝶  
有難い女房今夜は猪口がつき 露集  
有難く貰つて捨てた下戸の酒 柳  
質洗ひ老母の疲れの腰をもみ 抱逸  
字の読めぬ人が土建の社長なり 正柳  
上品を装い花嫁腹が空き 抱逸  
上品が残した茶菓子に子がたかり 淡泉  
書置も派手にアブレは家を捨て 正柳  
九月廿日 於 三染福利係室 富田 一葉報

問違ひでよかつた今朝の列車事故 抱逸  
完納の條に督促狀が来る マサミ  
良いとこへ来たつとつ三本目 奥田  
貸本屋好みをちやんと心得る 一葉  
お買ひ時なごと値上をほのめかし 笑呂九  
我々で決めた議員が値を上げる 川端  
生上りへ集金人の済まぬ顔 一葉  
生前の徳香篋の山を積み 常夫  
香篋の心算入院費を借りる 扇波  
雑川 小郡支部句會(山口縣)  
十月十日 於 小郡筆道俱樂部 長野 井蛙報

雑川 弓削支部句會(岡山市)

十月六日 於 公民館 福島 鉄兒報

出張の日取り数えてひげを剃り 不老  
出張の夫が氣になる電事事故 和子  
出張の泊りは縁故尋ねてみ 鉄兒  
出張で腹の痛まぬ酒に酔い 七面山  
名目が出張という温泉の泊り 鉄兒  
数人が旅望の辻袂合せに来 水甫  
交樂を見に大阪に出張し 十九平  
狸寝へ嫉は膝を外しかけ 鉄兒  
狸寝入りしてもめ事をのめれる氣 竹風  
狸寝と知らずにスリの手が伸びる 七面山  
子を寝かす母狸寝をしてみせる 同  
狸寝はさわごいところで暖をきる 丸太  
狸寝入り割勘を聞いて 和子  
狸寝をみんな言はせて起き上り 湖月  
修給日酔うているよな靴の音 白頭  
ベルの音迷惑そうに腰を上げ 竹風  
サラリーを嘲ける自轉車のきり 一貫  
足音へ云ふべき言葉用意する 十九平  
足音が聞へてやかんかけ直し 游子

雑川 姫路支部句會(姫路市)

十月八日 於 大川笑鬼居 真 一笑報

子は宮へ親は晝寝の他國者 燕子  
秋祭屋台稲田の中に浮き 笑鬼  
停電が月の終りに赤字出し 孤笑  
又停電でもこぼろきは鳴いてる 笑鬼

版写謄田阪  
二五町田芝区北市阪大  
会商田阪 式社 録会  
番一九九五 島福 話電  
番四一一三 六五

石原青龍刀沙人著 予約募集  
中國「龍沙句帖」  
風物吟  
大陸生活卅年身を以て吟じた中國風物の川柳と俳句各二百句。民族文化史上空前の記録的出版。上質本二百頁  
予價二百円(送料)申込同時百日前送  
締切廿七年一月十日、刊行二月中。  
東京・世田谷・太子堂二八六  
中込 山河発行所

消えぬ間に食べる夕餉の氣せわしき 一笑  
電氣とは降れば消えるものらしく 同  
シャンパンの泡或る日の娘と踊つたが 燕子  
新婚の運割笑つてすまされる 孤笑  
遮断機をくぐりそ、これて又運割 笑鬼  
内氣だと云はれ飲む氣になつて飲み 和水  
十月十四日 於 一郎居 木下 和水報  
高溪一郎君新婚披露  
御夫妻と云はれ新婚一寸てれ 和水  
花嫁を撮る写真屋の如才なし 一笑  
花嫁の歩く早さでつきそばはれ 同  
花嫁が来て急に赤い色が増え 一郎  
ないものゝひがみか友のあてこすり 燕子  
こすり笑つてすます仲のよき 笑鬼



川岡山縣廳支部句會(岡山市)

九月八日

於縣廳世話寮 部十九平報

白黒とテキパキやつて左遷され  
 白石を讀んで黒で負けて置き  
 やあ君もかて済みさもない鉢合せ  
 まつて来た筈がホールで鉢合せ  
 如才ない会釈ですんだ鉢合せ  
 鉢合せしてからまづ酒の味茶々  
 噲では残しているが火の車  
 うわざとは別のお方と結婚し  
 断食の願ひ届かず瘦せただけ  
 断食の願ひ届かず瘦せただけ  
 断食の願ひ届かず瘦せただけ  
 断食の願ひ届かず瘦せただけ

貧弱な土産へ子供ぶら下り 魚 善  
 十月十日 於永康病院會議室  
 大西 迷窓報

子のためを思うて掃除手傳はせ  
 根氣よく待てばパラソル見え初め  
 パラソルの反射僕の窓までさき  
 パラソルでさいらいな人はやうこし  
 足ばかり出してパラソルが歩む  
 パラソルで顔をかくて突き当り  
 病む窓へ祭囃子の太鼓の音  
 祭ばやし帰りは母の背で聞き  
 甘酒に故郷の祭を思ひ出し  
 九月十七日 於會社事務所

### 本 社 師 走 川 柳 大 會

日時 十二月一日午後六時  
 会場 大宝文化會館  
 兼題「現金」三句 路郎選  
 「場末」三句 沒食子選  
 「寄せ鍋」三句 生々庵選  
 席題 選者 当日発表  
 講演 麻生路郎  
 余興 喜劇  
 「惜しい句が」  
 小畑自由朗脚色  
 放送劇・福引等  
 會費 六〇円

河村日濤子報  
 樂天家かがとのちびた下駄をはき  
 後おしに女が付いてる樂天家  
 何もかも女房まかせの樂天家  
 保証付だと云ふ養子の酒のくせ  
 絶対やなあへ返事を変つてき  
 絶對よと彼女やさしくねんをおし  
 講和會議日本人の背の低くさ  
 講和への希望女も喋りたて

ピースまで講和の衣裳変えて出  
 クラス會博士役人労働者三歩  
 水爆の威力も知らず再軍備芳道  
 川柳同好會(大阪府)  
 醫師會 南區  
 九月十八日 於幸田一哲居

玉野川柳會(玉野市)  
 十月十四日 於日比支所階上  
 中村たのみ報  
 お祭りを子は買ふものを決めて居り  
 甘酒がすいたも云へず祭客  
 おみこしがあつた祭を思い出し  
 君とこの祭いつやと又飲む氣  
 今年から姉が祭の客となり  
 サिकासも山越えて来る村祭  
 ぶらりつと来てお祭の客となり

満年 満年  
 満年 満年  
 満年 満年  
 満年 満年

ふくばもう雛につながらる未亡人  
 限于兩ふくばが一つ欲しいとこ  
 ウインドの背廣は去年からの夢  
 飾り窓ついでに顔もうつして見  
 買へぬ身にモードを知らず飾り窓  
 ウインドへ懸崖の菊咲く魅力  
 ウインドの暦一足先に立ち  
 見るだけじよウインドに胸算用  
 見るだけは見て置きささ飾り窓  
 満年 満年  
 満年 満年  
 満年 満年

第二回山陽新聞  
 讀者川柳大會が  
 十二月九日(且)午前十時から岡  
 山市下石井の山陽新聞社講堂で  
 開催縣下縣外の柳人の參會歡迎  
 主催 山陽新聞社

品質優良  
 先ペンカチ  
 TACHIKAWA PEN  
 大坂市東區豊後町四八  
 立川商事株式會社





### てに局輯編

★毎月一回一日発行、十二月で十二冊、なんでもない様ではあるが、実際さううまくは行かないものである。長い年月には、からだを毀すこともあり、あらゆる支障を乗越さればならぬのである。ビシ／＼と月が出ていと云うことは、投句家、寄稿家、選者、画家、編輯者、印刷所、其他の協力が完全に行われてることを意味する。一九五一年の十二月号を少しの狂いもなく、お手許に届け得たことを編輯局としては大きなよろこびとして、同時に、すべてに協力して既定通り刊行させていた各位に心からの敬意を表するものである★本号の表紙は石田兵太郎氏を煩わ

し歌舞伎座の「源氏物語」のスケッチである。★歳末号の魅力として小畑自由朗氏が、上田春柳君の句を脚色して喜劇「惜しい句が」を寄せられた★戸田古方氏の壽像記事や生々庵理事長の「あいさつ」で、褒めちぎられ又々おもしろい思いをしてる。私は川柳が好きで川柳を作つて来たのだし、好きな川柳のために、いつか自分の一生を投じたのに過ぎないのである。しかし皆さんから、壽像を贈られたことに対しては衷心から感謝している。有難う。

(路郎)

開催(別稿記事参照)▼大阪市文化祭京阪神交歓市民川柳大会は十一月四日午前十時から毎日新聞社講堂で開催▼大阪通信病院川柳会は十一月十七日午後二時から五階講堂で開催▼南区医師会文化部杏林川柳会は十一月廿日午後七時から撈舟居で開催▼川雑出雲支部山陰川柳大会は十一月廿三日午前十時から出雲市公会堂で開催▼千石荘体温川柳会は十一月十八日午後二時から貝塚市千石荘で開催▼南海電鉄川柳会は十一月廿八日午後五時半から高師ノ浜南海高等学校階上で開催、以上何れも路郎主幹出席。

▼川雑京都支部句会は十月十六日午後 時から四條繩手東の仲源寺で開催▼体温川柳会(貝塚市)では十月十四日千石荘で句会開催▼玉野川柳会(玉野市)が十月

### 動 静

▼麻生路郎先生壽像贈呈川柳会は十一月三日午後一時から大室小学校リズム室で

十四日日比支所で創立句会を開催した。なお十一月十八日正午から玉野市主催の下に和田支所で文化祭川柳大会を開催すると▼水郷川柳社二十周年記念愛媛縣下大洲町柚木、松井邸で開催▼函館川柳社(函館市青柳町)では「川柳はこたて」第三号を大会記念号として十月五日に刊行一部二十円

▼田各部修三氏(西宮市)は令息桂一君の偲び草紙を刊行された▼山沢碌々氏(川崎市)は北加瀬一四三二(轉居)石原青竜氏(東京都)は平和條約を機として雅号を元の青竜刀とされた▼福岡葉留路氏(廣島市)は文化祭日に縣教育会主催の文化祭参加川柳大会に川雑会員として出席された。

### 結 婚 式 場

長生殿 6階

着付から 美容  
墨式、寫眞、披露  
まで 一切承り  
ますので  
きわめてお便利  
でございます

金曜定休  
松坂屋  
大阪日本橋

### 自轉車は シマノの

3.3.3号



最短時間で結ぶ  
大阪一名古屋

3時間 特急

毎日3往復

特急料金	¥100
上本町發	7.40 12.40 16.40
名古屋發	8.00 13.00 17.00

近畿日本鉄道

Printed in Japan

### 募 集

課題吟募集  
アルバイト(十句)  
誕生(十句) 中島生々庵選  
弘津柳慶選  
朝(十句) 奥村丹路選  
教室(十句) 大森風來子選  
每号募集

### 投稿規定

近作柳樽雜詠廿句 麻生路郎選  
川柳塔(雜詠) 麻生路郎選  
文章(評論・研究・感想其他)  
投稿規定 (毎月廿日締切)

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。  
▼「近作柳樽」は一般作家の雅吟を募る。  
▼「課題吟」は何人でも投句が出来る。  
▼「川柳塔」への投句は不朽洞会員に限る。

### 川柳雜誌

第六卷 第十二号

一冊 金三〇円  
送料(四円)

半ヶ年概算 金二〇四円  
一ヶ年概算 金四〇八円

昭和廿六年十一月廿五日印刷  
昭和廿六年十二月一日発行

大阪市住吉局内西片側五丁目二五番地  
編輯者 麻生 幸二 郎  
印刷所 川柳雜誌社  
發行所 川柳雜誌社  
郵政官廳 大阪七五〇五〇







